

埋蔵文化財調査報告書 99

大曲輪遺跡（令和 3・4 年度調査）

2024

名古屋市教育委員会

例言

- 1 本書は、愛知県名古屋市瑞穂区山下通5丁目に所在する国指定史跡大曲輪貝塚を含む大曲輪遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査の期間及び調査担当者は以下の通りである。
 - 令和3年度
調査担当者：名古屋市教育委員会文化財保護室 学芸員 藤田茂・水野裕之・林田愛美
調査期間：令和3年12月1日～令和4年2月18日
 - 令和4年度
調査担当者：名古屋市教育委員会文化財保護室 学芸員 杉浦裕幸・林田愛美
調査期間：令和5年1月12日～令和5年2月17日
- 3 大曲輪遺跡およびその北側に近接する下内田貝塚の範囲と残存状況を確認するための範囲確認調査を以下の民間調査機関に依頼して行ない、その結果は高木祐志 2022『名古屋市瑞穂公園陸上競技場整備等事業に伴う試掘調査報告書（大曲輪遺跡・下内田貝塚）』株式会社竹中工務店・株式会社二友組にて報告されたが、その調査の概略を再構成し、遺物の報告も本報告にて新たに行なった。
- 4 本書の編集は榎田泰之（名古屋市教育委員会文化財保護室学芸員）が行ない、執筆は藤田・杉浦・林田・榎田が担当した。石器の実測の一部は水野裕之が行なった。
- 5 試掘調査の実施に当たっては以下の関係者、関係機関に協力いただいた。
文化庁文化財第二課、愛知県県民文化局文化芸術課文化財室、名古屋市スポーツ市民局スポーツ推進部スポーツ施設室、公益財団法人名古屋市教育スポーツ協会、株式会社竹中工務店、株式会社二友組
- 6 「Ⅶ 自然科学分析」は、令和5年度に新美倫子氏（名古屋大学博物館）に依頼して林田および村木望子（名古屋市教育委員会文化財保護室）が協力して実施した報告を再構成したものである。
- 7 調査に関する事務手続きは、名古屋市教育委員会文化財保護室が担当した。
- 8 調査の記録や遺物の整理は、調査担当者の他、安藤明子、上田玲子、小川敦子、小浦美生、酒井史子、仲間理恵、榎上佐知子、六十蒔緑、山本雅代、村木望子が行なった。
- 9 瑞穂公園内に整備されたスポーツ施設は、総称として「名古屋市瑞穂運動場」であるが、平成27年度から株式会社パロマがネーミングライツを取得し、「パロマ瑞穂スポーツパーク」となった。本書では基本的に平成27年度以降の施設名を用いる。

凡例

- 1 調査記録の方位及び座標は、国土交通省告示に定められた国土座標の平面直角座標第七系に準拠し、世界測地系（測地成果 2011）にて表記している。メートル (m) 単位での表記を基本とする。
- 2 標高は全て T.P.(東京湾平均海面高度) による。(T.P.-1.412=N.P.(名古屋港基準面))
- 3 土層の土色に関しては『新版標準土色帖』(2021年版 日本色研事業株式会社)を用いた。
- 4 遺構図や遺物実測図の縮尺は、個々の図に表示している。
- 5 調査は令和3年度、整理および報告書作成は令和4・5年度国家重要文化財等保存・活用事業補助金の交付を受けて実施した。
- 6 調査記録・出土遺物については名古屋市教育委員会が保管している。
- 7 遺構の表記に関するものについては、下記文献を参考にした。
文化庁文化財部記念物課『定本 発掘調査のてびき』2016 同成社

目次

I	大曲輪貝塚・大曲輪遺跡の概要	1
I-1	周辺の環境	1
	遺跡の位置	(樋田・林田) 1
	地理的環境	(樋田・林田) 3
	歴史的環境	(樋田・林田) 4
I-2	周辺の遺跡	(樋田・林田) 6
I-3	これまでの調査	(樋田・林田) 6
	遺跡の発見から昭和55年の発掘調査まで	(樋田・林田) 6
	昭和55年の発掘調査	(樋田・林田) 8
	昭和55年の発掘調査で確認された成果	(樋田・林田) 8
	平成27年～令和元年の発掘調査	(樋田・林田) 11
	平成27年～令和元年の発掘調査で確認された成果	(樋田・林田) 11
II	調査の目的	12
II-1	令和元年度までの調査目的	(樋田) 12
II-2	令和3年度以降の調査目的	(樋田) 13
III	調査地点の概要	14
III-1	調査地点の概要	(樋田) 14
III-2	基本層序	(樋田) 15
IV	令和3年度試掘調査の成果	17
IV-1	令和3年度調査の経過	(樋田・林田) 17
IV-2	令和3年度の調査成果	(樋田・水野) 22
IV-3	令和3年度調査成果のまとめ	(樋田) 44
V	令和4年度調査の成果	46
V-1	令和4年度調査の経過	(杉浦・林田) 46
V-2	令和4年度の調査成果	(杉浦) 47
VI	令和3・4年度民間調査機関委託分の成果	57
VI-1	調査経過および成果の概要	(樋田) 57
VII	自然科学分析	61
VII-1	令和3年度大曲輪遺跡サンプルの貝及び動物遺体について	(新美・村木・林田) 61
VIII	まとめ	(樋田) 64

挿図目次

図I-1	史跡大曲輪貝塚・大曲輪遺跡の位置	1	図V-10	令和3年度 出土遺物(石器)実測図1	34
図I-2	史跡大曲輪貝塚と大曲輪遺跡の範囲	1	図V-11	令和3年度 出土遺物(石器)実測図2	35
図I-3	遺跡周辺の地質と遺跡の立地	2	図V-12	令和3年度 出土遺物(石器)実測図3	36
図I-4	尾張名所図会に描かれる簡池	5	図V-13	混貝土層の推定範囲	45
図I-5	大曲輪遺跡周辺の遺跡	7	図V-1	令和4年度 22A区 平面図・断面図	50
図III-1	大曲輪遺跡試掘調査地点全体図	14	図V-2	令和4年度 22B区 平面図・断面図	51
図III-2	調査地点の各箇所の特徴図	16	図V-3	令和4年度 22C区 平面図・断面図	52
図IV-1	令和3年度調査 グリッド配置図	17	図V-4	令和4年度 22D区 平面図・断面図	53
図IV-2	令和3年度 調査区平面図	23	図V-5	令和4年度 出土遺物(土器類・土製品・鉄製品)実測図	54
図IV-3	令和3年度 調査区平面オルソ画像	24	図VI-1	令和3・4年度 試掘調査地点断面図	58
図IV-4	令和3年度 東西トレンチ土層断面図	25	図VI-2	令和3・4年度 出土遺物実測図(土器類・石器)	59
図IV-5	令和3年度 南北トレンチ断面図	26	図VII-1	ブロックサンプル採集位置	63
図IV-6	令和3年度 出土遺物(土器)実測図1	28	図VII-1	混貝土層の推定範囲	65
図IV-7	令和3年度 出土遺物(土器)実測図2	29			
図IV-8	令和3年度 出土遺物(土器)実測図3	30			
図IV-9	令和3年度 出土遺物(土器)実測図4	31			

挿表目次

表I-1	大曲輪遺跡と周辺の縄文時代遺跡	3	表V-2	令和4年度 遺物観察表2 (土器類・土製品・鉄製品)	54
表I-2	昭和55年以降の大曲輪遺跡に関する調査と整備	9	表VI-1	令和3・4年度 遺物観察表(土器類・石器)	59
表IV-1	令和3年度 遺物観察表1(土器)	38	表VII-1	出土動物種名	63
表IV-2	令和3年度 遺物観察表2(土器)	39	表VII-2	貝類出土内容	63
表IV-3	令和3年度 遺物観察表3(土器)	40	表VII-3	6区サンプル魚類出土内容	63
表IV-4	令和3年度 遺物観察表4(石器)	40			
表V-1	令和4年度 遺物観察表1 (土器類・土製品・鉄製品)	53			

写真目次

写真I-1	昭和55年当時の臨陸トンネル	9	写真IV-37	南北トレンチ4区拡張区貝層	43
写真I-2	昭和55年発掘調査で検出された貝層	9	写真IV-38	南北トレンチ4区拡張区貝層	43
写真II-1	調査後追加指定された20トレンチ付近	12	写真IV-39	南北トレンチ5区貝層検出状況	43
写真II-2	解体が進むスタジアム	12	写真IV-40	南北トレンチ6区貝層検出状況	43
写真II-3	史跡大曲輪貝塚と解体前のスタジアム	13	写真IV-41	南北トレンチ7区貝層検出状況	43
写真III-1	検土杖による調査風景	18	写真IV-42	南北トレンチ8区付近土層堆積状況	43
写真III-2	検土杖によるサンプル	18	写真IV-43	南北トレンチ9区付近土層堆積状況	44
写真III-3	土壌サンプルの先行洗浄作業	19	写真IV-44	東西トレンチ石冠出土状況	44
写真IV-4	4区拡張区の掘削作業	19	写真IV-45	東西トレンチ建物B付近土層断面	44
写真IV-5	調査区全景	20	写真IV-46	有識者による現地指導	44
写真IV-6	調査区設定状況	21	写真IV-47	埋め戻し作業	44
写真IV-7	表土除去作業	21	写真IV-48	復旧状況	44
写真IV-8	4区拡張区貝層	22	写真V-1	出土遺物1	49
写真IV-9	東西トレンチ南壁	25	写真V-2	出土遺物2	49
写真IV-10	南北トレンチ東壁	25	写真V-3	出土遺物3	49
写真IV-11	石冠出土状況	25	写真V-4	22A区確認状況 西から	55
写真IV-12	出土土器1	32	写真V-5	22A区 東壁 西から	55
写真IV-13	出土土器2	32	写真V-6	22B区確認状況 東から	55
写真IV-14	出土土器3	32	写真V-7	22B区 SD01 土層確認状況 北から	55
写真IV-15	出土土器4	32	写真V-8	22B区 SD01 土層確認状況 北東から	55
写真IV-16	出土土器5	32	写真V-9	22B区 SD01 遺物出土状況 北西から	55
写真IV-17	出土土器6	32	写真V-10	22B区 SD01 遺物出土状況	55
写真IV-18	出土土器7	32	写真V-11	22BSD01・SK01 断面 東から	56
写真IV-19	出土土器8	32	写真V-12	22BSD01・SK01 断面 北から	56
写真IV-20	出土土器9	33	写真V-13	22B区完備状況 北東から	56
写真IV-21	出土土器10	33	写真V-14	22C区確認状況 西から	56
写真IV-22	出土土器1	37	写真V-15	22C区 南壁 北から	56
写真IV-23	出土土器2	37	写真V-16	22C区完備状況 北西から	56
写真IV-24	出土土器3	37	写真V-17	22D区 完備状況 南西から	56
写真IV-25	出土土器4	37	写真V-18	22D区東壁 西から	56
写真IV-26	出土土器5	37	写真VI-1	61トレンチ断面 南西から	60
写真IV-27	出土土器6	37	写真VI-2	61トレンチ遺物(5)出土状況 南から	60
写真IV-28	調査区全景	37	写真VI-3	66トレンチ断面 北東から	60
写真IV-29	調査区と山崎川	41	写真VI-4	66トレンチ完備状況 東から	60
写真IV-30	山崎川と下内田貝塚	41	写真VI-5	87トレンチ断面壁 北西から	60
写真IV-31	南北トレンチ表土除去後の状況	42	写真VI-6	87トレンチ下半断面 西から	60
写真IV-32	作業風景	42	写真VI-7	出土土器1	60
写真IV-33	東西トレンチ土層堆積状況	42	写真VI-8	出土土器2・石器	60
写真IV-34	南北トレンチ全景	42	写真VII-1	シンダー層上面のフーチング床掘状況	65
写真IV-35	南北トレンチ4区拡張区掘り下げ作業	42	写真VII-2	下内田貝塚の混貝土層	65
写真IV-36	南北トレンチ4区拡張区貝層精査	42			

I 大曲輪貝塚・大曲輪遺跡の概要

I-1 周辺の環境

・遺跡の位置

縄文時代前期を中心とする貝塚である国指定史跡「大曲輪貝塚」は愛知県名古屋瑞穂区山下通5丁目目目所在する。市の中心部から見て南東方向にある「瑞穂公園」内に位置する。史跡の範囲を含む一帯は、周知の埋蔵文化財包蔵地の大曲輪遺跡としても知られている。遺跡の範囲は史跡の

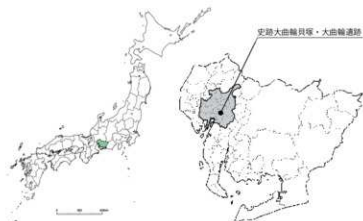


図1-1 史跡大曲輪貝塚・大曲輪遺跡の位置

南東方向に広がっており、一部は「パロマ瑞穂スタジアムパーク（瑞穂陸上競技場）」にも広がっている。現在、パロマ瑞穂スポーツパークは令和8(2026)年のアジア・アジアパラ競技大会に向けて改築工事が行われており、併せて史跡整備も進めている。この運動場の前身を建設する工事は昭和14(1939)年に始まったが、その工事の際に大曲輪遺跡および北側に近接する下内田貝塚が見つかった。

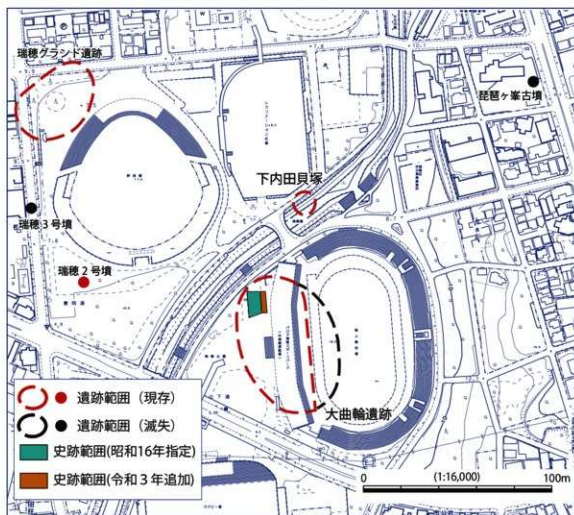


図1-2 史跡大曲輪貝塚と大曲輪遺跡の範囲

I 大曲輪貝塚・大曲輪遺跡の概要

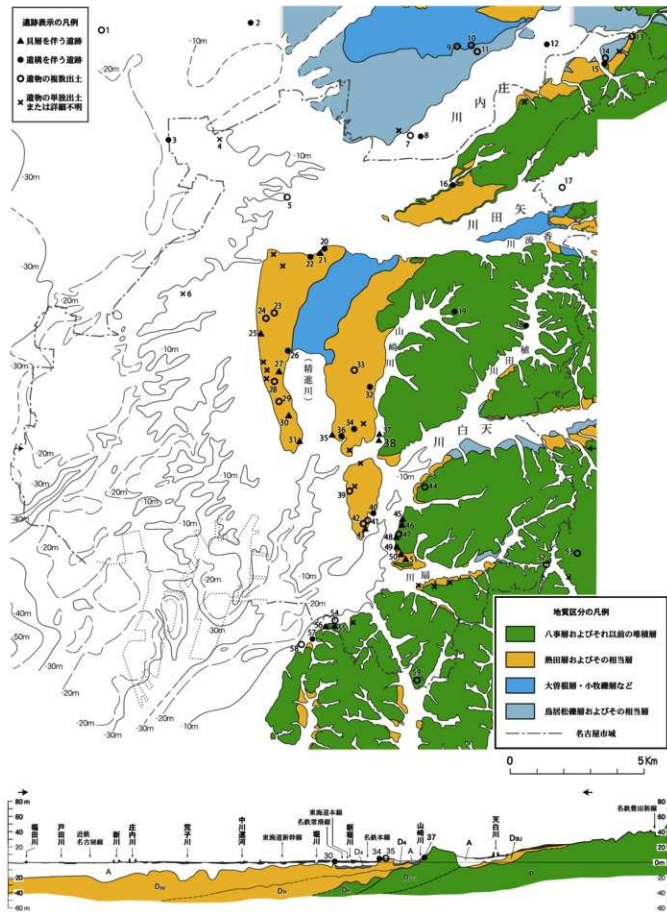


図 1-3 遺跡周辺の地質と遺跡の立地

伊藤正人 (2003) 所収の図面を編集・トレース

表1-1 大曲輪遺跡と周辺の縄文時代遺跡

No.	遺跡名	時期	貝塚	概要	No.	遺跡名	時期	貝塚	概要
1	下津遺跡			下津跡跡下層に包含層(土器)	31	新宮取貝塚	▲	貝塚	
2	堤下遺跡			石明伊(堅穴住居)・土坑	32	長戸町遺跡			住居跡1基
3	朝日遺跡			溝路・貯蔵穴・土坑	33	阿山知通遺跡			土器少量
4	貴生町遺跡			土器片少量	34	瑞穂遺跡			住居跡1基
5	志賀公園遺跡			土器数点	35	欠上貝塚	▲	貝塚	
6	遊里ヶ池			双耳壺1点	36	田光遺跡			土坑
7	町田遺跡	●		茂谷(中期)・火山灰(後〜晩期)	37	下内田貝塚			住居跡・埋葬人骨・貝塚
8	松戸戸遺跡	●		土坑・集石遺構・集石戸・火山灰	38	大曲輪遺跡	●	▲	住居跡・貝塚(前期) 住居跡・埋葬人骨・土器箱(晩期)
9	上八田遺跡			ナイフ形石器25点など	39	曾池遺跡			土器少量
10	梅ヶ坪遺跡			ナイフ形石器・尖頭器など	40	見晴台遺跡			低地型貯蔵穴3基(晩期)
11	梅ヶ坪南遺跡			ナイフ形石器5点など	41	下新町遺跡			石器・土器片少量
12	神原遺跡			土坑(中葉)・住居跡(後葉)	42	市場遺跡			石器・土器片少量・貝塚?
13	白鳥遺跡			土器多数・石器数点	43	船畑貝塚	▲	貝塚	
14	樹木遺跡			尖頭器2点など	44	北沢遺跡			ナイフ形石器・細石核・尖頭器
15	二ノ輪遺跡			土器箱1基	45	上ノ山貝塚	●	▲	貝塚・集石(伊?)
16	牛牧遺跡			住居3軒・土器箱50基以上	46	大根貝塚	●	▲	貝塚
17	印場茶里遺跡			土器2点	47	三王山遺跡			石器・土器・土偶
18	飯井遺跡			土器箱1基	48	鉦ノ木貝塚	●	▲	貝塚
19	東明町遺跡			土器箱1基	49	清水寺遺跡			貝塚・住居跡?
20	片山神社遺跡			炊鉢1基・土器多数	50	光正寺貝塚			貝塚(中期?)
21	長久寺遺跡	▲		貝塚	51	雷貝塚			埋葬人骨・貝塚
22	東二葉町遺跡			住居跡・土器・石器片少量	52	勸使池遺跡			ナイフ形石器2点など
23	白川公園遺跡			土器約200片	53	若王子遺跡			ナイフ形石器2点など
24	蟹三蔵通遺跡	●		谷科面・土器・石器多数	54	善徳遺跡			土器少量・土偶
25	岩井遺貝塚	▲		貝塚	55	水上貝塚群	▲	▲	小貝塚
26	富士見町遺跡			土坑(聚果類加工場)	56	富山貝塚群	▲	▲	小貝塚
27	古沢町遺跡	▲		小貝塚	57	トドメキ遺跡			貯蔵穴
28	東古渡町遺跡			土器少量	58	塚森遺跡			土器少量・土偶
29	高蔵遺跡			ピット・土器少量	59	共栄遺跡			ナイフ形石器・角灘状石器
30	玉ノ井遺跡			住居跡・埋葬人骨・土器箱・貝塚					

遺跡範囲の東側、スタジアム内については滅失の取り扱いとなっているが、戦後一貫してスタジアムとして供用されてきたため、どの程度遺構が残されているかの情報が把握されていなかった。そのため、平成27年度～令和元年度にかけて下内田貝塚も含めた陸上競技場周辺の遺跡範囲確認調査を行ない、『埋蔵文化財調査報告書91 大曲輪遺跡(試掘調査)』として令和3(2021)年に報告書を刊行した。

・地理的環境

現在の^{ヤマダギ川}大曲輪遺跡と下内田貝塚の間を流れる山崎川は、名古屋市千種区の平和公園内にある^{おこやほら}猫ヶ洞池などに源を発し、昭和区、瑞穂区から南区へと流れ、港区で名古屋港へと注いでいる。最上流部にあたる千種区付近では、昭和50年代初頭に暗渠化が進んだため、現在では川の流れを確認することはできない。

図1-3には地質区分ごとに遺跡周辺の平面図及び断面図を示した(伊藤2018を一部改変)。山崎川を挟んだ西側には、^{あつたさち}熱田台地(瑞穂台地・名古屋台地)を形成する熱田層、一方で東側の東部丘陵は矢田川累層とその上に不整合に覆っている唐山層と八事層で構成されている。矢田川累層は第三紀鮮新世(約500～170万年前)に形成された砂、シルト、粘土などで構成されている。

唐山層は礫層主体の地層であり、チャート・砂岩・頁岩・濃飛流紋岩・ホルンフェルスなどの円礫からなる。これらの礫は、著しく風化が進み一般に「くさり礫」とよばれ、その色調は非常に多様なものである。唐山層の堆積年代は花粉分析の結果などから約80万年前をこえない程度の年代と推定されている。唐山層は、上位の八事層に不整合に覆われており、地形面は観察されない。

八事層は、名古屋東部丘陵の頂部に分布しており、チャート主体の円～亜円礫構成である。砂礫中には数mから10m程度の間隔で粘土や砂層が挟まれている。チャート礫は風化が進み、表面が白色になっている。鉄分の沈着が顕著で、赤褐色を呈している部分も多い。

1 大曲輪貝塚・大曲輪遺跡の概要

山崎川は唐山層・八事層を浸食して流れ、現在の河床でも両層が包含する円礫を多量に観察することが可能である。

大曲輪貝塚・大曲輪遺跡は現在山崎川の左岸に立地し、過去の写真の分析や、明治期の正式図からも読みとれるように、遺跡範囲の南西で一段低い地形となっていた。現在は山崎川の護岸工事や、公園の整備に伴って大きく改変されてしまっているが、山崎川の対岸から遺跡の南西方向、現在の新瑞橋方面に向けて低地は広がっていた。昭和 55(1980)年調査の報告書でも指摘していることだが、大曲輪遺跡・下内田貝塚が面する山崎川の谷地形は、大曲輪遺跡付近で幅が狭くなっており、下内田貝塚北方の北西から流下する支流(支谷)と合流する付近でやや幅を広げている。明治 24 年の地形図には、下内田貝塚の北方に、「かなまゑの池 鼎池」と「しんあまゑの池 新雨池」がある。谷筋に堤防を築いた人工の溜池と考えられ、山崎川はこの 2 つの池の東側の丘陵裾を南下している。現在の河道は、ほぼこれを踏襲している。2 つの池やその下流の水田は昭和初期以降に順次、埋め立てられ現在の瑞穂公園が造成された。

鼎池やその南側の新雨池の形状は、山崎川の本来の河道が、ため池の築堤によって幅を広げた姿と捉えれば、大曲輪遺跡の西側の谷が現況の谷地形へと自然につながる流路が推定できる。その下流の流路の西岸には、瑞穂台地の段丘面のうち低位の面に瑞穂 1 号墳・瑞穂 3 号墳が所在する。瑞穂 1 号墳・瑞穂 3 号墳の東側 100m には瑞穂 2 号墳が所在するが、1 号墳・3 号墳と 2 号墳の間は小さな谷が入っている。縄文海進の高頂期にあつてはこの谷部分に流路があつたと推定される。

これを認めれば、大曲輪遺跡と下内田貝塚の位置関係は、現在あるような山崎川を挟んだ対岸に立地するものではなく、丘陵西端部に近接あるいは一連の立地が復元される。大曲輪に貝塚が形成されはじめた縄文時代前期は、その初め頃(約 7,000 年前)に縄文海進と呼ばれる海面上昇が最高頂に達し、現在よりも高位の海面が想定されている。現在、大曲輪遺跡から下流約 1km の新瑞橋付近までが感潮域であるが、沖積層の堆積が進行していない当時、海岸線はさらに大曲輪遺跡に近かった可能性が考えられる。縄文時代の山崎川河口付近において、縄文海進高頂期の海岸線を正確に復元することは困難だが、遺跡の南西方に小さな内湾が形成されていて、そこに注ぐ山崎川河口に近い立地を求めて遺跡が形成された可能性も考えられるであろう。

縄文前期の海進、それよりも規模が大きい 12 万年前とされる最海進期には今は異なった堆積状況が認められ、河口部堆積と開析を繰り返しながら、現在の地形を形作った可能性があるだろう。

・歴史的環境

大曲輪遺跡の昭和 55 年の調査では古墳時代の竪穴建物 3 軒確認されており、山崎川を挟んだ対岸には瑞穂古墳群も立地する。ただ古墳時代以降の居住痕跡はそれほど多くない。今回の調査でも、古墳時代～古代の須恵器、中世以降の山茶碗や陶磁器類が出土しているが量は少ない。

遺跡周辺は近世段階では中根村、北井戸田村に挟まれた名古屋新田の一部となっている。名古屋新田は一般の村と異なり、万治年間(1658～1660)から新田頭の兼松源蔵と小塚源兵衛が、名古屋村を初めとして前津小林・御器所・古井・本井戸田・北井戸田・大喜・本願寺・本願寺外新田・中根・石仏・川名・八事など併せて 18 カ村を巡視して自己資金により小規模な新田をあちこちに開墾したとされている。遺跡周辺も水田もしくは畑地としての用途が主であり、居住痕跡が多いわけではない。鼎池や新雨池もこう

した農地開発の流れの中で開発されたのかも知れない。

山崎川の名は江戸時代に河口近くに立地した山崎村(現在の南区呼統二丁目付近)にちなむ。同様に中流部では飯田街道が川を越える川名村の村名から、川名川とも呼ばれていた。

山崎川は周辺の台地や丘陵を水源としており、ちょうど瑞穂台地(熟田台地・名古屋台地)と東部丘陵の間を流れる格好となっている。名古屋城下周辺は台地や水田の広がる低地が広がっており、比較的平坦な地形が続いている。川の流れも緩やかで、水田の悪水路の役割を果たし、なおかつ潮の干満の影響を受けるような河川が大部分であった。

そうした中で山崎川を挟んだ東側に広がる丘陵や、山崎川の清流は城下の人々にとってのもっとも身近な景勝地であり、『尾張名所図会』にも数多くの地点が紹介されている。「糟漢」や「鼎池」のほか、東山から低地を望む景色などが盛んに描かれた。

図1-4に示した場面は、「中根村鼎池堤畔の秋萩」と題して、鼎池の周辺で萩の花見を楽しむ人々と風景が描かれている。尾張名所図会が描かれた当時、鼎池自体は北井戸田村の村域であったはずであるが、人々が集う細長い地形と後方に丘陵が見える景観からは、この絵図が山崎川の谷の上流から南東(大曲輪遺跡方向)を望んでいるものと思われる。

近世段階には、大曲輪遺跡の平坦面を南北に塩付街道が開かれていた。中世末より、星崎七カ村といわれた山崎・戸部・笠寺・本地・南野・荒井・牛毛の各村の塩浜は、良質な塩の生産が盛んで「前浜塩」としてよく知られていた。近世初頭には約100ヘクタール近い塩浜があったと伝えられているが、産地間競争や新田開発による水質の悪化などによって江戸後期には衰退していったといわれている。ただ東海道方面から内陸への物流路として近世近代を通じて役割を果たし続けた。塩付街道は富部神社あたりから桜村を北上、新屋敷村で塩付橋を渡り、山崎川の左岸を大曲輪遺跡付近まで北上する。現在のスタジアムの東側を通り、山崎川左岸の堤防にあたり、その後山崎川を橋で渡り、新雨池の堤防をこえて村上方面に北上していく。現在の遺跡付近も多くの人々が往来しただろう。

現在の景観に近づくのは、昭和14(1939)年の名古屋市総合運動場整備に伴う開発以降であろう。遺跡



図1-4 尾張名所図会に描かれる鼎池

の発見にもつながるこの公園整備事業は戦前から戦後にかけて次第に整備が進められ、昭和25(1950)年の第5回国民体育大会でいったん区切りを迎える。逐次改修が加えられながらも、老朽化の理由から昭和55(1980)年7月より瑞穂陸上競技場の改築工事が実施されることになった。

I-2 周辺の遺跡

図1-5は明治24(1891)年の地形図に遺跡範囲を示したものである。水田利用が個々にどの年代まで遡るものかは確認できないが、大曲輪遺跡(27、以下図I-5の番号を示す)に貝塚が形成された時代には、海面が高位の状態で沖積層も未発達であり、山崎川の河口周辺は内湾砂泥底を好む貝類が豊富であったと推定される。西方の瑞穂台地南西端付近には、粕畑式土器が主体の欠上貝塚(12)がある。

旧石器時代～縄文時代草創期には台地上で断片的な石器・石片の採集例が知られるのみである。早期後半の欠上貝塚は、この範囲の良好な採貝環境を反映したものであろうが、破壊時の採集資料であり、情報が乏しい。同じ頃に新宮坂貝塚(6)や南方の笠寺台地北縁の新屋敷貝塚(32)でもわずかな遺物が出土しているが、やはり詳細は不明である。

前期には大曲輪遺跡以外では遺物の出土が知られておらず、中期前葉から後葉の前半についても、大曲輪にのみ少量の遺物が見られる。中期末が近づくと、西方の瑞穂台地上・大喜町6丁目遺跡(16)で土器の出土が知られ、瑞穂遺跡(23)で住居跡が発見されている。これに次ぐ後期初頭の遺物は、熱田台地の高蔵遺跡(1)で少量が把握されているのみである。後期前葉以降後期末までの遺跡も、玉ノ井遺跡(2)の少量の後期末遺物を除けば、下内田貝塚(26)と大曲輪遺跡しか知られていない。晩期には、大曲輪遺跡と玉ノ井遺跡に集落が発達し、東海系の文様をもつ土器群が続く期間には盛行を見せた。晩期中葉の遺跡は希薄で、晩期末は玉ノ井遺跡と大曲輪遺跡の他、田光遺跡(17)で浮線土器の出土が知られている。

I-3 これまでの調査

・遺跡の発見から昭和55年の発掘調査まで

大曲輪遺跡は、昭和14(1939)年に「名古屋市総合運動場」の造成工事中に発見された。

工事関係者からの情報が、工事が本格化する以前に愛知県史蹟名勝天然記念物調査会の小栗鐵次郎にもたらされたことにより、北村斌夫の貝塚での小掘削以降、大曲輪貝塚周辺で4回、下内田貝塚で2回の発掘調査を経て、貝層の主要部分を国史跡「大曲輪貝塚」として保存するに至った。当時の発掘調査実施面積は、大曲輪貝塚・遺跡合計で19m²、下内田貝塚の調査面積は36m²であった。大曲輪貝塚(貝層)の面積は360m²、周辺の包含層残存面積は9,000m²と推定されていた。なお、下内田貝塚の貝層の面積は240m²と記されている(小栗1941)。

愛知県史蹟名勝天然記念物調査会が収集した遺物は、太平洋戦争の戦局が緊迫する中で、博物館施設などに分散移管された。大曲輪貝塚・下内田貝塚の出土品の一部は名古屋市の保管するところとなり、昭和30(1955)年には東山動物園の所蔵となっていた。それ以後名古屋城での展示が行なわれていた記録があるが、現在では小栗の文化財調査記録類とともに名古屋市博物館が所蔵している。

その後の大曲輪遺跡は、戦後順次陸上競技場施設や瑞穂公園が整備されていくなかで、史跡として指定されていたこともあり、発掘調査等が行なわれないまま、現地で保存されてきたものの史跡指定地の範囲が不明瞭となる事態が生じていた。

I 大曲輪貝塚・大曲輪遺跡の概要



明治26年発行「名古原」「熱田」：国土地理院提供。

- | | | | |
|------------------------|---------------------|-------------------------|-----------------------|
| 1 高城遺跡 (弥生～中世) | 21 稲山町遺跡 (古墳) | 41 榎本町遺跡 (古墳～中世) | H 高田3号墳 |
| 2 玉ノ井遺跡 (弥生～中世) | 22 十六町1丁目遺跡 (弥生) | 42 六本松遺跡 (弥生～平安) | I 高田2号墳 |
| 3 森後町遺跡 (弥生～中世) | 23 塚跡遺跡 (弥生) | 43 榎台遺跡 (古墳～平安) | J 薬師寺古墳 |
| 4 熱田神社遺跡 (弥生～中世) | 24 津賀山遺跡 (弥生・古墳) | 44 榎町遺跡 (弥生・古墳・平安・鎌倉) | K 津賀山古墳 |
| 5 熱田神宮南門前遺跡 (弥生～中世) | 25 笹原町遺跡 (弥生) | 45 稲田貝塚・日保町遺跡 (弥生～中世) | L 稲塚古墳 |
| 6 新宮坂遺跡 (縄文～中世) | 26 下内田貝塚 (縄文) | 46 弥生町遺跡 (中世) | M たままる古墳 |
| 7 新御町遺跡 (鎌倉) | 27 大曲輪遺跡 (縄文) | 47 春日野町遺跡 (縄文～古墳) | N おつくり古墳 |
| 8 亀坂町遺跡 (弥生・古墳) | 28 東原教遺跡 (縄文・弥生) | 48 足間台遺跡 (縄文～中世) | O 朝塚古墳 |
| 9 西米町遺跡 (縄文遺跡) (弥生・古墳) | 29 松原町遺跡 (弥生) | 49 稲田町遺跡 (弥生～中世) | P おどり古墳(まごころ山、おとぎ山古墳) |
| 10 大森遺跡 (弥生・古墳) | 30 山崎町2丁目遺跡 (弥生・中世) | 50 榎本町地蔵遺跡 (弥生～中世) | Q 瑞穂1号墳 |
| 11 大倉柳林遺跡 (弥生・古墳・鎌倉) | 31 山崎遺跡 (弥生・古墳) | 51 笠寺観音遺跡 (弥生・古墳・中世・近世) | R 瑞穂3号墳 |
| 12 矢上遺跡 (縄文) | 32 新原敷日塚 (縄文) | 52 大門遺跡 (弥生～中世) | S 瑞穂2号墳 |
| 13 大倉C遺跡 (弥生～室町) | 33 飯土町遺跡 (弥生・古墳・鎌倉) | 53 松城町遺跡 (平安) | T 長尾ヶ原古墳 |
| 14 大倉B遺跡 (鎌倉～室町) | 34 仁所遺跡 (弥生・古墳・鎌倉) | A 榎元山古墳 | U 井守塚古墳 |
| 15 大倉A遺跡 (平安～室町) | 35 山崎町3丁目遺跡 (古墳～中世) | B 白鳥古墳 | V 鳥羽八幡社古墳 |
| 16 大倉町6丁目遺跡 (縄文) | 36 菅原遺跡 (縄文～中世) | C 八高2号墳 | W 鳥羽神社古墳 |
| 17 田丸遺跡 (縄文～古墳) | 37 呼見遺跡 (弥生～中世) | D 八高古墳 | X 町見古墳 |
| 18 北光町遺跡 (弥生) | 38 榎本町1丁目遺跡 (弥生・古墳) | E 高田古墳(五山古墳) | Y 稲神明社古墳 |
| 19 在野町遺跡 (弥生) | 39 榎台町遺跡 (弥生・古墳) | F 高田4号墳 | |
| 20 十八町B遺跡 (平安～室町) | 40 榎小学校遺跡 (弥生) | G 高田5号墳 | |

※ 瑞穂など、中世以降の一部の遺跡は省略

図1-5 大曲輪遺跡周辺の遺跡

・昭和55年の発掘調査

大曲輪遺跡の発掘調査は、昭和55(1980)年の陸上競技場建物の老朽化による建て替え工事計画に伴うものであった。これに対応するため、前年(昭和54年)11月に遺跡西側の駐車場部分で試掘調査を実施して、部分的な貝層の残存を把握したことが当時の調査記録に残る。

昭和55年2月より競技場の解体建物下に遺跡が残存していないと推測して工事を進めていたが、解体跡地でも貝層の残存が確認されたことから、急速調査を行なうこととなった。その後、貝層の残存状況確認のため、5月に実施された試掘調査の結果、発掘調査が必要な面積は約1,200m²と見積もられた。史跡指定地に近接する調査であることから、慎重を期して調査指導委員会が設置された。

発掘調査は6月9日より10月2日までの期間で実施した。調査が進行する中で、調査区南方に遺跡の残存範囲が広がることが把握されたため、最終的な調査面積は約2,400m²となった。遺構や包含層は、解体された競技場基礎で寸断されていたが、基礎間など部分的ながら良好な残存も見られた。

なお、昭和55年以降の大曲輪遺跡に関する事項を表1-2に記した。

・昭和55年の発掘調査で確認された成果

○縄文時代前期の貝層

貝層は昭和55年調査範囲の北部、史跡指定範囲の東にあたる場所に確認された。周辺の基本的な土層は、上位から順に①主に縄文時代晩期の遺物を包含する茶褐色土層、②主に縄文時代前期の遺物を包含する黒色土層、③地山直上にあつて少量の遺物を包含する黒色土層、④地山(八事層：黄色砂層や砂礫層)であった。これらの層の中で、縄文時代前期の貝層が堆積しているが、③層の上部あるいは②層の下半に堆積・包含されたものと理解される。貝層付近では、貝塚(貝層)に由来する黒色土に断片化した貝が混じり、前期土器を多く含む層もあるようだが、混貝土層が良好な貝層を覆う部分については、中期以降の再堆積も推定された。

貝層の形成時期に関する情報としては、貝層範囲における貝層形成以前の包含層は、清水ノ上Ⅰ式・Ⅱ式を主とする。貝層下部にあたる貝層の主体は、清水ノ上Ⅱ式～鉢ノ木Ⅰ式、貝層上部にあたる貝層の主体は、北白川下層Ⅱb・Ⅱc式(並行期)が想定されている。

○縄文時代前期の住居跡

1か所で重複する2軒の住居が把握されている。隅丸方形の一部という印象を受ける8号住居跡と略円形のプランで8号住居を切る9号住居である。検出時点では1軒と認識されていたこともあり、遺物は混在傾向を示す。出土土器には新旧を示す時期幅が見えることから、在地系の量的にまとまる一群(芦戸式)が8号住居に伴い、北白川下層Ⅲ式と捉えられる一群が9号住居に伴う可能性が考えられるが、その他の東日本系土器などとの関係は明示できない。

○縄文時代晩期の住居跡

縄文時代晩期の住居は、詳細不明を含めて6軒を把握した。略円形の11号住居を除いて明確な平面形

表1-2 昭和55年以降の大曲輪遺跡に関する調査と整備

西暦	元号	月	事項
1980	昭和55	2月	第2次スタンド解体工事に資す。スタンド下の跡地に遺跡が残存することが、市民から文化庁への通報で知られる。
		5月	スタンド解体跡地で試掘調査。発掘調査対象範囲の設定、史跡指定地範囲の推定を行う。(文化財保護室で記録保存)
		指定地測定調査作業日(文化財保護室で記録保存)	
1981	昭和56	6月	発掘調査着手(6月9日～10月2日)
		指定地測定測量成果納品(354.532261m、107.246009坪)	
1981	昭和56	3月	「瑞穂陸上競技場内大曲輪遺跡発掘調査概要報告書」刊行
1982	昭和57	7月	名古屋市博物館特別展「東海の縄文時代」開催。昭和55年調査出土の前期土器5点、前期土偶3点、後期土偶2点などを展示(名古屋市博物館1982)。
1993	平成5	11月	名古屋市見晴台考古資料館特別展「名古屋の縄文時代」に、名古屋市が保管する大曲輪遺跡出土品を展示。資料集では遺跡に関する文献資料を整理、名古屋市域内資料と昭和55年出土品から遺物71点を図示。昭和55年調査について「確認された遺構は、前期住居跡2軒、晩期住居跡6軒、晩期の土器箱7基、人骨3体など」と記す(見晴台考古資料館1993)。
1995	平成7	2月	大曲輪遺跡の前期土器3点を写真掲載し、「大曲輪タイプ」とする。「この型式の土器は、東海から、中部・関東地方北部まで、希薄ながらも広い範囲に分布する。北川下層式土器様式と、諸磯式土器様式の両者が共有する土偶型式」と解説(原田1995)。
2008	平成20	11月	「日本考古学協会2008年度愛知大会」を南山大学で開催。シンポジウムⅠは「縄文時代晩期の貝塚と社会—東海からの展開—」(日本考古学協会2008年度愛知大会実行委員会2008)。
2014	平成26	12月	名古屋市博物館特別展「感じる縄文時代」を南山大学人類学博物館と共催。大曲輪遺跡をはじめ市内・県内遺跡出土品を展示。(川合剛2014)
2015	平成27	11月	「平成27年度考古学セミナー—あいちの考古学」開催(名古屋市博物館・名古屋市教育委員会文化財保護室・愛知県埋蔵文化財センター主催)、発表の小テーマⅠは「大曲輪貝塚—瑞穂グラウンドの縄文遺跡—」。遺跡、土器、石器、土偶・発身具について発表資料で概説、貝・骨に関するコラムを掲載。開催前後の期間に、名古屋市博物館常設展示室に関連する出土品のミニ展示コーナーを設定。昭和55年調査の中間報告的提示。
2016	平成28	1月	平成27年度試掘調査実施
2016	平成28	7月	平成28年度試掘調査前半実施
2017	平成29	2月	平成28年度試掘調査後半実施
2018	平成30	3月	「史跡 大曲輪貝塚保存活用計画」策定
2018	平成30	3月	「埋蔵文化財調査報告書80 大曲輪遺跡」刊行(伊藤正人、他2018)
2018	平成30	12月	平成30年度試掘調査実施
2019	平成31	1月	東海縄文研究会・第15回愛知研究会「大曲輪遺跡と縄文時代前期」を名古屋市博物館で開催(東海縄文研究会2019)。
2019	令和元	7月	令和元年度試掘調査実施
2021	令和3	3月	講演会「史跡大曲輪貝塚を巡る 縄文時代のムラを巡る」を名古屋市博物館で開催
2021	令和3	3月	「埋蔵文化財調査報告書91 大曲輪遺跡(試掘調査)」刊行(編纂院、他2021)
2021	令和3	10月	「大曲輪貝塚」の国指定史跡指定地(354.54㎡)東側に見つかった貝層部分(134.98㎡)の追加指定告示。
2021	令和3	11月	～2022年1月 大曲輪貝塚の国指定史跡部分で文化財保護室による試掘調査実施(本報告)
2021	令和3	11月	～12月・2022年3月・5月 競技場周辺の大曲輪遺跡・下内田貝塚で民間調査期間による試掘調査実施(本報告)
2022	令和4	2月	講演会「コゾツ考古学 人骨から読み解く縄文時代」を誠心ホールで開催
2023	令和5	1月	～2月 競技場南西の大曲輪遺跡で文化財保護室による発掘調査実施(本報告)
2023	令和5	6月	-8月 名古屋市博物館常設展示フリースペース展示「縄文時代とその他—大曲輪遺跡—」



写真1-1 昭和55年当時の瑞穂陸上競技場



写真1-2 昭和55年発掘調査で検出された貝層

1 大曲輪貝塚・大曲輪遺跡の概要

を確認できた例はないが、4・5・6・10号住居とも方形が基本であると思われる。11号住居は、小型で柱穴も把握されておらず、内部に大型の土坑が重複することから、住居跡と確定できない。また、7号住居は平面形を示せず、調査記録の断片情報をもとにピットが密集する付近に存在を予想したものである。こうした住居痕跡の可能性がある地点は、他にも多く認められる。大曲輪遺跡に限らず、熟田台地の遺跡調査で黒色土中に同色の埋土のため把握困難な住居や遺構が多数存在したものと推定される。10号住居は、上面付近で「土器群」が把握されているが、住居に関わるものかは不明である。11号住居によって削られた4号住居では炉跡(地床跡)が認識されたという。

○縄文時代晩期の土坑墓と土器棺

土坑墓1基(2号人骨)と土器棺が確認されている。土器棺に関わる可能性がある土器は24個体あるが、蓋として用いられたものも含んでおり、最大19基と捉えられている。

2号人骨は、前期貝塚の北東端部に位置し、土器棺は貝塚南方の住居域と重複していた。2号人骨は、仰臥屈葬の全身骨であるが、土坑墓の形状は把握できなかった。胸部上面から出土したイヌ1体は頭蓋骨が欠けるがほぼ残存している。人骨が葬られてから、あまり年月を置かずイヌも葬られたと考えられている。時期を示す土器は伴っていないが、抜歯され、刺突文の土玉を伴ったこと、周辺の土層状況から晩期前半の位置づけられている。他に断片的な時期不明の人骨3点がある。

土器棺の主體的な時期は晩期前半である。埋設状況は、口縁を上に向けた正位と推定されるものが3基ある。その他は、おおむね横位埋設と思われるが、一部斜位の可能性も残る。設置のための掘り込みが、明確に捉えられた例はないようである。

○その他の縄文時代の遺物

以上に述べた貝層や遺構に伴う遺物の他に、土器・石器類が多数出土している。石器類も前期・晩期を主体とするが、最古の遺物は旧石器時代のサヌカイト製角錐状石器である。石器の時期比定は一部を除いて困難だが、石鏃・石錐・石匙・磨製石斧・打製石斧・石皿・磨石・叩石の他、石棒石剣類が出土している。また装身具として珧状耳飾が3点出土している。

前期の土製品で特筆すべきは、3点の板状土偶片がある。現状、東海地方では唯一のものであり、太平洋側で最も西の出土例である。土偶は、他に後期前半が1点、後期末～晩期の土偶6点(以上)がある。土製品には耳飾4点もあり、晩期前半のものとして推定される。この他、ヤス・針・鏃などの刺突具を主体とする骨角器25点も提示されているが、これらの自然科学分析は十分なされていない。

○古墳時代の住居

1号～3号住居の3軒が確認されている。いずれも方形で、もっとも残存が良好な1号住居は、北壁にカマドを伴う可能性がある。住居に伴う遺物は少ないため時期を明確に決定できないが、包含層を含めた周辺の遺物は古墳時代前半(廻間Ⅲ式)のS字状口縁台付甕、古墳時代中期(宇田式)の宇田型甕などの土師器や7世紀代とみられる須恵器が出土している。

・平成 27 年～令和元年の発掘調査

昭和 16 年の史跡指定から 80 年ほどの年月が経過した 2010 年代後半、指定地の東に位置する陸上競技場では 2026 年の第 20 回アジア・アジアパラ競技大会を念頭に新たな陸上競技場の改築が計画されることとなった。

工事による史跡大曲輪貝塚の保存への影響が想定されることから、平成 29(2017)年には大曲輪貝塚の本質的価値を確認・共有し、史跡を適切に保存管理するとともに、活用・整備の基本方針を明確にするため、名古屋市教育委員会は保存活用計画を策定した。

この計画の策定を念頭に、大曲輪貝塚及び大曲輪遺跡の現状での遺存状況を確認するために平成 27 年度に 10 地点、28 年度に 11 地点で試掘調査を実施した。また、この際に調査を行えなかったスタジアム内の状況や史跡隣接地の貝層の広がりおよび保存状況を確認することを目的として平成 30 年度に 29 地点、令和元年度に 4 地点で試掘調査を実施した。なお、平成 27 年度の試掘調査は山崎川の掘削などにより滅失した埋藏文化財包蔵地とされてきた下内田貝塚（うち 2 地点）も対象とした。

・平成 27 年～令和元年の発掘調査で確認された成果

○大曲輪貝塚について

史跡指定範囲と昭和 55 年調査地の間に当たる平成 30 年度の 20 トレンチ・21 トレンチにおいて貝層の分布を確認した。貝層からの出土遺物は縄文時代前期前半の土器を中心に石器・獣骨類も確認された。貝層に含まれる貝はハイガイが主体でカキ・アカニシも含まれる。昭和 55 年調査部分の遺構については調査後に失われているが、史跡指定範囲を含めた縄文時代前期に形成された貝層が一定程度残存している可能性が高い。

○大曲輪遺跡について

平成 28 年度の D トレンチやその西側にあたる令和元年度の 40 トレンチで縄文時代晩期前半を主体とする遺物包含層を確認した。

なかでも 40 トレンチで晩期の土器棺が確認されたこと、その周辺に位置する平成 28 年度 B トレンチ・令和元年度の 39 トレンチ・40 トレンチで縄文時代晩期および古墳時代の遺物の出土量が多いこと、昭和 55 年調査地の近接部分では縄文時代晩期の土器棺 1 基と古墳時代前期の住居 2 棟が確認されていることから、この周辺に縄文時代晩期および古墳時代前期の生活痕がままとまっていることが想定される。

○下内田貝塚について

大曲輪遺跡と下内田貝塚は一連の遺跡であると考えられ、山崎川右岸の下内田貝塚は江戸時代以降現代にいたる山崎川の河川工事などで滅失したと考えられてきたが、調査により二次的な堆積であるものの遺跡に由来する土層を確認した。縄文時代晩期の土器や須恵器、貝類や石器が出土した。

これらの成果を受けて、昭和 16 年の史跡指定部分の東側にも縄文時代前期の貝層が良好に連続して保存されていることが判明したため、もともとの 354.54m² に加え東側のインターロッキング部分 134.98 m² についても令和 3(2021)年 10 月追加指定となり、合計 489.52m² が国指定史跡となっている。

II 調査の目的

II-1 令和元年度までの調査目的

史跡大曲輪貝塚及び埋蔵文化財包蔵地である大曲輪遺跡は、その全体が瑞穂運動公園内に立地し、発見の端緒ともなった昭和14（1939）年の、「名古屋市総合運動場」の造成工事以来、今日に至るまで遺跡範囲の大半が陸上競技場の施設内となっている。昭和55（1980）年の陸上競技場改築工事の際に、既設の競技場メインスタンドの地下に遺跡が残存していることが判明し、名古屋市教育委員会は記録保存目的の発掘調査を実施した。また発掘調査に先立ち、同年6月に名古屋市教育委員会は史跡指定地の確定測量を行ない、以降、確定測量範囲を史跡指定地として保存管理を行ってきた。

しかし、史跡指定から80年ほどの年月が経過し、指定地の東に位置する陸上競技場の改築が計画された。この工事施工によって、史跡大曲輪貝塚の保存への影響が想定されたため、平成29年度には大曲輪貝塚の本質的価値を確認・共有し、史跡を適切に保存管理するとともに、活用・整備の基本方針を明確にするため、保存活用計画を策定した。

平成27年度から28年度の試掘調査は、この基本構想の策定を念頭に、大曲輪貝塚及び大曲輪遺跡の現状での遺存状況を確認するために実施したものである。平成30年度、令和元年度の試掘調査は27・28年度に調査を行なえなかったスタジアム内の状況や史跡隣接地の貝層の広がりおよび保存状況を確認することを目的とした。特に史跡である大曲輪貝塚で縄文時代の中でも主に前期と晩期に中心がある貝層及び遺跡のそれぞれの包含層の広がり、残されている遺構の状況を確認することも目指した。また地山の八事層と山崎川の堆積物の関係を確認した上で、遺跡が立地する旧地形の状況の確認も目指した。

前章で記載したように、平成27年度及び28年度調査では陸上競技場の西側、広場を中心に調査区を設定し、包含層の広がりを確認した。また27年度の9・10トレンチは山崎川の対岸、下内田貝塚内に設定した試掘トレンチである。試掘の結果、史跡指定範囲の西に旧水路が南北方向に延びており、それを境界に西側はさら低くなっていることが確認された。またスタジアムの西側に古代の遺物を含む包含層が認められ、その西限が水路を伴う段差までであることがとらえられた。遺跡の範囲外であったが、この包含層についても競技場改築計画の事業計画の中で保護するべきものとして取り扱っていくこととなった。

平成30年度は陸上競技場の改修工事に合わせて、陸上競技場内についても試掘調査を実施した。競技



写真II-1 調査後追加指定された20トレンチ付近



写真II-2 解体が進むスタジアム

場施設内の地表下の状況、特に過去の競技場施設の上に重ねるように競技場施設整備が繰り返されてきた状況が明らかとなった。施設が盛り土を繰り返しながら整備されてきたことで、スタジアム内部にも包含層等が残されている可能性が高いことも確認された。

令和元年度の調査は史跡隣接地を調査し、貝層の広がりや、縄文時代晩期の包含層の広がりを確認した。特に史跡のすぐ東側の20・21トレンチでは貝層の広がりを確認し、昭和55年の調査の際に確認された貝層が史跡範囲までつながる可能性が高いことが判明した。この結果を受けて試掘地点も含めた範囲が令和3年度に史跡に追加指定された。

II-2 令和3年度以降の調査目的

本報告で報告する令和3年度以降の調査は、陸上競技場並びに史跡整備に関わる関連調査である。

令和3年度調査は、史跡の指定後初めて史跡指定範囲内の調査を実施した。今回の工事施工にかかる中で事業者選定にあたり、令和2年度に「瑞穂公園陸上競技場整備等事業要求水準書」が示された。その中には史跡周辺の整備の一つとしてガイダンス機能の増強が盛り込まれていた。これを受けて、名古屋市教育委員会は令和3年度に、史跡整備を進めるにあたって、大曲輪貝塚の基本的な情報や史跡範囲内における遺構や貝層の残存状況を確認するために試掘調査を実施した。今回の調査は周辺の試掘調査の状況等から、史跡指定範囲の東側に貝層が広がるのが想定されたため、令和3年度の追加指定以前の指定範囲を対象とした。史跡範囲の東端に南北方向のトレンチを設定し、それに直行するトレンチを西側に広げ、最終的にT字状のトレンチとして調査した。史跡範囲内であることから掘削規模は限定的なものとし、トレンチ調査とは別に検土杖を用いて堆積土の調査を同時に実施した。

令和4年度の調査は、スタジアム工事の施工にあたって大曲輪遺跡の包含層の一部に影響を与える可能性があったため、周知の埋蔵文化財包蔵地として緊急発掘調査として実施したものである。競技場の工事ではスタンドを支える基礎に数百のフーチングが設置されるがそのうちの4基が包含層に影響を与える可能性があったため、発掘調査を実施した。

また、下内田貝塚では橋脚設置の可否を判断するため、試掘調査を実施した。

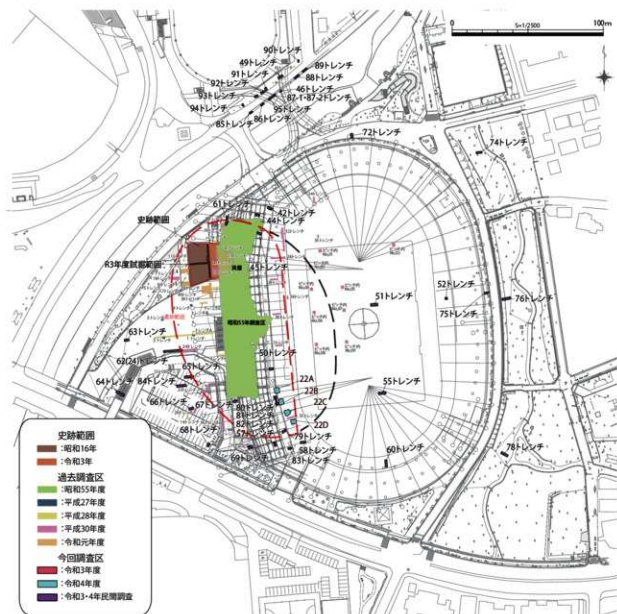


写真II-3 史跡大曲輪貝塚と解体前のスタジアム

Ⅲ 調査地点の概要

Ⅲ-1 調査地点の概要

令和3年度と令和4年度の調査について報告する。令和3年度の調査では史跡内にT字型のトレンチを設定し貝層の残存状況の確認を行ない、令和4年度の調査ではスタジアムの内側に4か所の調査区を設定し、調査を実施した。なお、図Ⅲ-1には「Ⅵ 令和3・4年度民間調査機関委託分の成果」で述べる令和3・4年度に行なった民間調査機関の試掘調査地点も併せて示している。



図Ⅲ-1 大曲輪遺跡試掘調査地点全体図

Ⅲ-2 基本層序

1 基盤土層

今回の競技場改修にかかる事業範囲地内において確認された地山（基盤層）は、チャートを主体とした円礫を中心とした砂礫等で、部分的にシルト質の土壌の堆積を確認している。これは八事層の堆積土層もしくは山崎川が運んだ水成堆積物である可能性が高い。八事層は全体としてチャートの径数 cm 大の円～亜円礫よりなる礫層を主としており、層厚は東山丘陵で 30 m 前後、鳴子丘陵西部では 50 m 以上堆積が見られる。調査地点の東側の公園内では部分的に露頭も確認できる。試掘や工事立会に際して確認をしたところ、競技場トラックの南北主軸寄り東側では、スタジアムの造成土の直下で八事層が露出し、西側では河川堆積物等が堆積している状況が確認された。西側は八事層が基盤となった丘陵を削り取り、東側は山崎川の河川作用による堆積物が基盤となっていることがわかる。

この地山の上に遺物包含層など黒味の強い土層が堆積していることが遺跡の大部分で確認された。

2 基本層序

包含層と考えられる土層中にも円礫となったチャートが多い。また遺物の包含量は多くの地点で上下に分層され、特に上層で遺物が確認できた。包含層よりも上位の堆積層は、陸上競技場の建設や施設改修の影響を受けている土層が多く、それぞれの場所によって異なる。陸上競技場内では現況のウレタン舗装の下にバラスをはきみ、モルタルによる改良土の層が確認できる。改良土の下には客土や周辺から押し上げられた土層が確認できる。昭和 55 年のスタジアムの解体後の整地土の上に、スタジアム観客席の建設用大型重機の走路としての地盤改良、その後バラスを敷き整地、コンクリート舗装の上にウレタン層を整えてスタジアム内の走路を整備した状況が確認できる。電気・水道等の埋設管も、この順に照らすと。昭和 55 年のスタジアム改築前からのもの、改築工事に伴うもの、改築工以降に敷設されたものが区別できる。

昭和 55 年の堆積土の下にはそれ以前の競技場施設の痕跡が認められる地点もあった。特に旧トラックのアンツーカーや、排水改良剤としてのシンダーアッシュなどがそのまま残されていることが確認された。大ぶりの礫の上にシンダーアッシュを敷設して水はけの改良を行ない、その上にアンツーカーを敷き固めていることがわかる。このシンダーアッシュとその直下の礫の下には、旧表土もしくは耕作土、包含層が堆積していることが確認できた。シンダーアッシュ層は黒味が強く、しまりが弱い。この土層は調査後の施設解体や、新規スタジアム工事の立会の際に、現地でも包含層が保全されているかを判断するうえで重要な役割を果たした。

張芝が施されている競技場中央のピッチ部分には、グラウンドの改修設計図通りに張芝部分及び排水のための排水資材が確認された。この改良土の下に遺物包含層に当たる土層を確認した。遺物の量は少ないが、9 か所設定したピッチ内のトレンチのうち、南東部分では粒子の細かい砂質土の堆積が認められ、土層上位にかけて漸移的に黒味が強くなっていく状況を確認している。何らかの水成堆積である可能性が考えられよう。ピッチ内 No.9 トレンチでは掘り込みを確認し、遺構内より縄文時代中期後半の土器片が出土している。

競技場の西側、駐車場施設やインターロッキングブロックで舗装された広場付近は西に向かって基盤

III 調査地点の概要

が下っているようで、現況の平らな地形を作り出すため大量の山土盛り土がされており、西側に行くほど盛り土が厚い。旧地形も史跡指定範囲の西端を境に西側が低くなっており、競技場整備以前は水田等が広がっていたようである。



図III-2 調査地点の各箇所の模式図

IV 令和3年度試掘調査の成果

IV-1 令和3年度調査の経過

・調査計画と史跡現状変更申請

史跡指定範囲地点を対象とした令和3年度調査では、史跡の本質的な価値を有する貝層の状況を正確に把握することが最大の目的であった。一方で国の史跡指定範囲を対象とした調査であることから史跡に与える影響を最小限にしつつ進める必要があった。そのため、トレンチ発掘と有識者会議で提案のあった検土杖によるサンプル調査を組み合わせて調査を計画した。

発掘調査については文化庁と協議の上、令和3年10月19日付3教文第223号として文化庁宛現状変更許可申請書を提出した。計画した調査内容は以下のものである。

初めに2m間隔で検土杖（サンプル採取部16mmサイズ）による土層堆積状況の確認を行う（7cm² × 47地点計329cm²）。次に幅1.5m、南北方向22.0m、東西方向12.5mの規模（合計面積49.5m²）でトレンチを設定し、試掘調査を行う。作業に当たっては表土・造成土は小型重機を用いた機械掘削とし、それより下位、旧耕作土より下層は人力掘削とする。旧耕作土等を除去し、貝層の上面が検出された高さで、面的な掘削は止め、貝層が面的に確認できない部分については、貝層の保存に影響を与えない範囲でサブトレンチを設定して掘り下げを行ない、土層の堆積状況を確認する。貝層分布範囲内の攪乱については、必要に応じて攪乱土を除去し、貝層の厚み、堆積状況を確認する。貝層の広がりを確認後、「史跡大曲輪貝塚の整備に関する懇談会」構成員の指導の下、貝層部分に平面30cm × 30cmの柱状サンプル採取範囲を最大で3箇所設定し、サンプル採取を行う。掘削終了後は、掘削底を山砂（厚さ5cm）で保護したのち、発生土で埋め戻しを行う。

上記の現状変更について、令和



図IV-1 令和3年度調査 グリッド配置図

IV 令和3年度試掘調査の成果

3年11月19日付3文庁第1640号で文化庁より現状変更許可を受けたうえで、令和3年12月1日より現地での作業を開始した。

・調査グリッドの設定

今回調査対象としたのは昭和16年に史跡指定された範囲である。ほぼ平面形状台形の範囲の土層堆積状況を正しく把握するために、旧史跡範囲東側の境界線を南北に結んだラインを基準にして、調査区トレンチの設定を行い、併せて2.5m方眼のグリッドを設定した。

グリッドには北西端を基準として北から1,2,3・・・、北からA,B,C・・・と名前を振り、検土杖調査の計測点の決定や遺物の取りあげ単位とした。

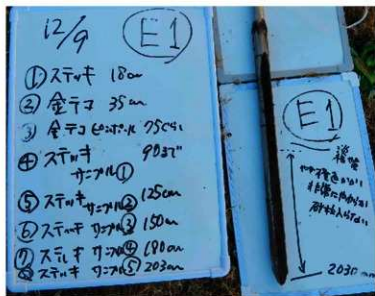
・検土杖調査

検土杖を用いた調査は、各グリッド北西端にあたるポイントA1、B1、E5の3地点からサンプル採取を始めた。検土杖は柄のついた金属製の杖で先端部分が太くなり、そのスリット部分で土壌が採集できる器具である。大曲輪貝塚付近は基盤土層が礫を含んだ八事層であり、礫にあたるると試料採集が困難になる。史跡範囲内は表層に30cmほどの山砂が敷設されているため、いずれの地点もG.L. - 25cmほどの深さまでは杖が入るが、それ以下は礫のため貫入が難しい状況であった。その後は鉄棍を使用するなどして補助的な穿孔と組み合わせたと、最深で200cm以上までサンプルを採取することができた。

A1～C1の北端の並びで順番に作業を進め、A1 = G.L. - 147cm, B1 = G.L. - 150cm, C1 = G.L. - 184cmまで杖が届きサンプルを採取することができた。その後も作業を進め、E1ではG.L. - 90cm以下は柔らかい土層が続き、G.L. - 203cm（検土杖の打設限界）まで打ち込んでも礫層にあたらなかった。これは水路等の施設にあたった可能性が考えられる。作業効率も考えてE列の南北方向の並びに切り替えて作業を進めたが、E6の作業中に検土杖が破損したため、12月13日で作業を終えた。最終的にサンプル採取を実施できたのは11地点77m²のみであった。



写真IV-1 検土杖による調査風景



写真IV-2 検土杖によるサンプル

・トレンチ調査

検土杖による調査の後、次に幅 1.5m、東西方向 12.5m、南北方向 22.0m の規模で T 字状のトレンチを設定した。トレンチの掘削範囲を設置し、その後南北トレンチの東側、東西トレンチの南側をそれぞれ 0.7m 幅で掘削を行なった。表土・造成土は小型重機を用いて機械掘削をし、旧耕作土より下層は人力掘削を実施した。これまでの試掘調査の成果から、貝層直上には細かな破砕貝を含み、近世の陶磁器などが含まれる旧耕作土が覆っていることが判明しており、その近世耕作土の上面で機械掘削を止めた。

機械掘削の結果、破砕貝を含んだ貝層上面の耕作土は、南北トレンチの E3 グリッド付近から E7 グリッド付近、東西グリッドでは、C5 グリッド中央以東に広がっていることが確認できた。この範囲について破砕貝が確認できたが、貝を含まない耕作土は、さらに広がりを見せていた。東西および南北トレンチについては耕作土上面で精査を行ない、破砕貝の分布範囲をおさえた。

南北トレンチ内では、トレンチ自体の東壁とグリッドの北のラインを基準として、30cm × 30cm の範囲のサブトレンチを設定した。E 1 グリッドと南北トレンチ東壁の交点を北東端としたサブトレンチをサブトレンチ 1 とし、以下 E2 グリッドにサブトレンチ 2、E3 グリッドにサブトレンチ 3 と順に設定していった。結果、南北トレンチに 1～9 のサブトレンチを設定した。同様に東西トレンチ内には西から A～E のサブトレンチを設定した。これらのサブトレンチは、調査時や遺物取り上げの際には 1～9 トレンチ、A～E トレンチと呼称した。(以下サブトレンチの個別記述は 1～9 トレンチ、A～E トレンチとする。)

南北トレンチでは、1～9 トレンチ設定後、破砕貝を含む耕作土を掘削しながら、貝層の頭出しを行なった。その結果、3～7 トレンチでプライマリな堆積ではないものの貝がまとまって認められる混貝土層を確認した。また貝層が認められなかったサブトレンチについては、一定の厚さごとに遺物を取り上げながら地山を確認できる深さまで掘り下げを進めた。

貝層の保全のため貝層の掘削は最低限にとどめたが、現状変更許可を受けた平面 30 cm × 30 cm の柱状サンプルについては、5 トレンチ、6 トレンチを対象として実施することとした。5 トレンチのサンプルは T.P. = 5.20m 以上の部分をカット①とし、以下 5.20-5.15 m をカット②、5.15-5.10 m をカット③としてサンプル採集を進め、カット⑩ (4.80-4.75m) まで 10 カットのサンプルを採集した。同様に 6 ト



写真IV-3 土壌サンプルの先行洗浄作業



写真IV-4 4区拡張区の掘削作業

IV 令和3年度試掘調査の成果

レンチではT.P. = 5.10m以上の部分をカット①とし、カット⑥(4.90-4.85m)まで6カットのサンプルを採集した。

貝層サンプルの採集と並行して、貝層の情報を記録するために、0.7m幅で掘削を進めていた南北トレンチのうち、貝層の残りがよいと判断された部分については、長さ2mの範囲の中で、現状変更許可範囲内に収まる1.5m幅までトレンチの幅を西側に広げることとした。具体的にはE4グリッドの西寄りの部分を対象とすることにした。この長さ2m部分については表土から全て人力掘削で掘り下げていくこととした。4区拡張区と呼んだこの範囲を掘り進めていくと、近代以降の攪乱により上位層は大きく損なわれていたものの、混貝土層は損なわれず、ほぼ全面に残されていることが確認された。混貝土層の上面を丁寧に清掃し、貝や獣骨、遺物の頭出しを行なったうえでフォトグラメトリによる3次元計測作業を行なった。

東西トレンチは、昭和16年に足跡範囲された範囲の東西いっぱいには設定したが、貝層の広がりはその範囲の東半に限定されており、東西トレンチの西半からは貝は出土していない。ただしこれまでの周辺試掘調査から貝層よりも西側については、西に向かって下る地形であることが確認されており、そうした状況を再確認するためにA～Eトレンチの掘削を進めた。しかしながら想像以上に地山までの堆積が厚く、30cm×30cmのサブトレンチの範囲内では掘削することが難しくなった。そのため、A～Eトレンチを調査区の掘削範囲いっぱいの70cm×70cmの範囲で手掘り掘削を進め、そのサブトレンチをつなぐようにトレンチ壁面にサブトレンチを0.3m幅で伸ばし、地山までの土層の堆積状況を確認した。掘削はすべて人力で行なったが、この過程でC5グリッドとD5グリッドの境界付近で完形の石冠が出土した。出土層位は貝層と同レベルに相当するものだが、形状等から縄文時代晩期のものと考えられる。

掘削終了後、トレンチには山砂(厚さ5cm)で保護したのち、発生土で埋め戻しを行なった。

なお、現場期間中、「史跡大曲輪貝塚の整備に関する懇談会」の構成員に随時、現地指導を仰いだ。



写真IV-5 調査区全景

調査経過抄

令和3(2021)年

- 11月19日(金) 現状変更許可。
調査進行等について調査事業者と調整。
11月29日(月) 検土杖の調査ポイントの設定。史跡範囲の略測作業。調査区トレンチ等の設定。
12月1日(水) 検土杖のポイントの記録を行った。仮レベル基準は旧史跡範囲の南東隅の釘とする。
12月2日(木) 検土杖の調査も開始する。ポイントA1、B1、E5の3地点に検土杖でサンプル調査。
トータルステーションでTB13 杭から敷地内に杭の振り込み。
12月3日(金) 雨天休工。
12月6日(月) 雨天休工。
12月7日(火) トレンチ設定範囲での検土杖のテスト。
12月8日(水) 検土杖調査の本格開始。A1～C1の北端の並びで順番に作業を進める。
12月9日(木) E3からE5の検土杖調査
12月10日(金) E6より南のサンプル採取を進めたが途中検土杖が破損しサンプル最終困難に
12月13日(月) 対応協議のため休工。
12月14日(火) 表土除去開始。
12月15日(水) 調査区・貝層略測図の作成。
12月16日(木) 精査を行う。午前整備委員会。
12月17日(金) トレンチ掘削 下内田貝塚試掘
12月20日(月) トレンチ掘削 下内田貝塚試掘
12月21日(火) 東西トレンチのサブトレンチ掘削。南北トレンチの壁面精査および土層図の作成。
12月22日(水) 貝層の状況確認するため、トレンチを部分的に掘り進め、貝を露出させる。
12月23日(木) E4グリッドで貝層を確認。東西トレンチにサブトレンチを設定。
12月24日(金) 降雪休工。排水とシートの復旧を行う。
12月27日(月)

令和4(2022)年

- 1月11日(火) 雨天休工。3次元計測について打ち合わせ。
1月12日(水) 貝層から西側に向かって拡張区を設定し人力掘削する。
1月13日(木) 埋掘り部分の貝の頭出し、東西トレンチのサブトレンチを掘削。田原市増山氏来跡。
1月14日(金) 朝方降雪。可能な範囲の掘削を進める。
1月17日(月) 拡張区精査。遺物をトータルステーションで取り上げながら貝層の頭出しを進める。
1月18日(火) 名古屋大学山本直人・新美倫子先生現地指導。
1月19日(水) 拡張区掘削精査。
1月20日(木) 拡張区掘り進める。サブトレンチ貝層上面まで掘削。スタジアム内解体立会。
1月21日(金) 東西トレンチ壁面写真撮影
1月24日(月) 拡張区貝層頭出し 東西トレンチ土層断面撮影。
1月25日(火) 休工
1月26日(水) 精査 南北トレンチ写真撮影
1月27日(木) 完掘写真撮影 5・6区30×30サンプル採集
1月28日(金) 5・6区30×30サンプル採集 ビデオ撮影
1月31日(月) 5・6区30×30サンプル採集 ビデオ撮影
2月1日(火) 5・6区30×30サンプル採集
2月2日(水) 5・6区30×30サンプル採集
2月3日(木) 5・6区30×30サンプル採集 山砂養生
2月4日(金) 埋め戻し



写真IV-6 調査区設定状況



写真IV-7 表土除去作業

IV-2 令和3年度調査の成果

・貝層の状況にかかる情報

今回の調査の最大の目的は、史跡指定範囲内における貝層の残存状況の確認であった。平成30年度に策定した「史跡大曲輪貝塚保存活用計画」の中でも「文化庁に所蔵されている史跡指定にかかる文書に記載されている史跡指定範囲と、昭和55年の確定測量範囲を照合したところ、両者は重複しながらも、確定測量範囲が、前者の史跡指定範囲に対して西側にずれている可能性が高いことが判明した。」とあるように、史跡指定地と貝層の間に位置のずれが生じている可能性があったためである。また確定測量範囲内の貝層の状況は不明といわざるをえない状況であった。

平成30年度調査の20トレンチ・21トレンチでは破砕貝を伴う近世・近代耕作土が混貝土層を覆う状況を確認しているが、これらのトレンチのすぐ西にあたる今回の調査地点でも、同様の堆積状況が確認された。図IV-4・5に示した土層図の4層とした土層が破砕貝を伴う近世・近代耕作土、5層が貝層（混貝土層）にあたる。

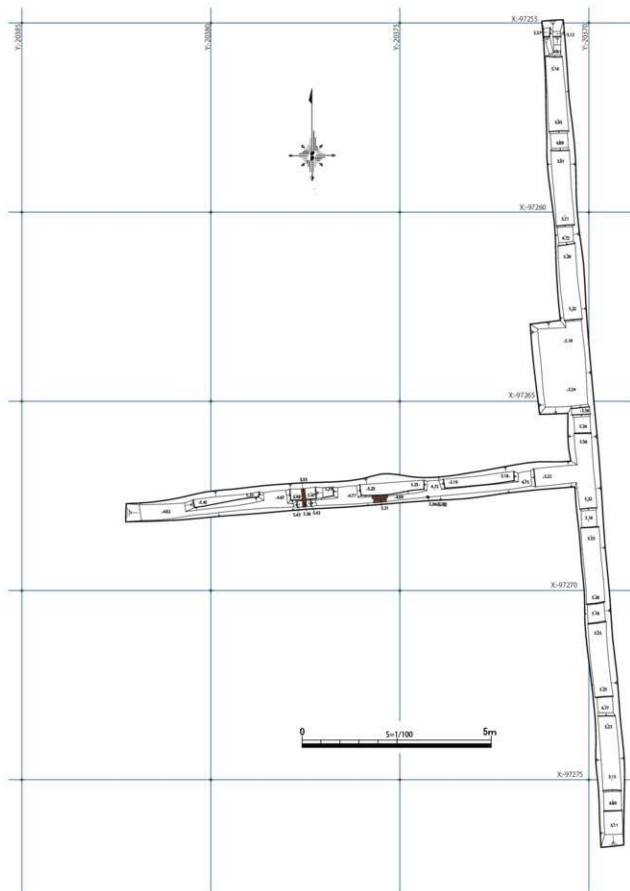
今回のトレンチ調査の成果からは、調査範囲の東側中央、E5グリッド付近を中心として、西へ行くほど貝の量が減少する状況が確認された。4層の広がりには北がE2グリッド中央付近、南がE7グリッド、西がC5グリッド付近まで破砕貝が広がっている。5層混貝土層はE4～E7のサブトレンチで確認しているが、東西トレンチのE5グリッドのサブトレンチでは非常に薄い堆積であった。貝層の中心から貝の含有量は次第に減少していくものの、土層はさらに外側に向かって広がっており、東西トレンチ出土の石冠も5層に相当する土層から出土している。また今回の調査ではサブトレンチの掘削土を持ち帰って洗浄したところ、細石刃など旧石器時代の遺物が確認された。そのほか縄文時代晩期後半の土器も出土しており、長期間にわたって土地利用が繰り返されてきた場所であることが再確認される結果となった。

・貝層以降の土層堆積にかかる情報

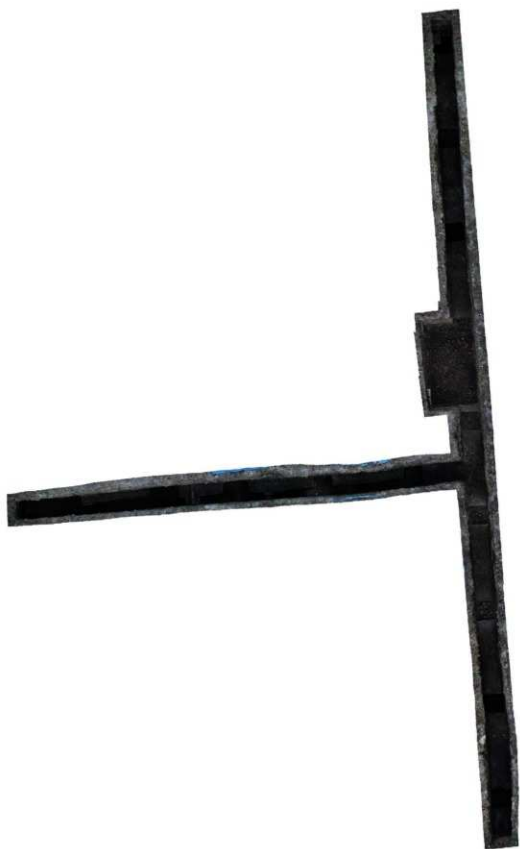
今回のトレンチ調査は史跡に与える影響を最小限にするため、平面的な掘削面積を最小限にとどめるように進めた。そのため平面的な情報は限られたものであり、調査区壁の土層観察から得られた情報をまとめておく。東西トレンチ・南北トレンチも基本的に1層を1980年のスタジアム整備以降整備にかかる山砂や芝生の養生土、2層はスタジアム整備にかかる客土や造成にかかる土砂移動に関わる土層、3層は耕作停止以降、近代に堆



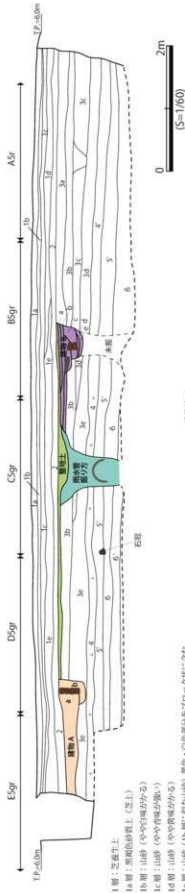
写真IV-8 4区拡張区貝層



図IV-2 令和3年度 調査区平面図



図IV-3 令和3年度 調査区平面オルソ画像



図IV-4 令和3年度 東西トレンチ土層断面図

1層：芝草土

1a層：黒褐色砂質土（芝土）

1b層：山砂（やや空気感がある）

1c層：山砂（やや空気感がある）

1d層：山砂（やや空気感がある）

2層：山砂（山砂に似た山砂）黄色・白色部分をブロック状に含む。

2層：パワースを中心とした土層。山砂に $\phi 2 \sim 20$ mm大の円礫チヤートを多数に含む。砂質部側の造成土か。

3a層：褐色土（やや空気感がある） $\phi 1 \sim 2$ mm大の円礫、 $\phi 1 \sim 2$ mm大の炭化物を少量含む。粘性しまりりともやや有り。

3b層：褐色土（やや空気感がある） $\phi 3 \sim 5$ mm大の円礫チヤートを多数に含む。

3c層：褐色土（やや空気感がある）粘性があるがしまりり強く蒸らみ、 $\phi 2 \sim 3$ mm大の炭化物をごく少量含む。

3d層：褐色土（やや空気感がある）やや空気感がある粘性有り。しまりり弱く蒸らみ。

3e層：褐色土（粘性がある） $\phi 3 \sim 10$ mm大の粗砂粒を多数は多く含む。粘性弱く蒸らみ。

4層：淡褐色土（粘性がある） $\phi 2 \sim 3$ mm大の円礫チヤートを少量含む。縄文上期・石器を含む遺物も含む。粘性しまりりともやや有り。

5層：褐色土（やや空気感がある） $\phi 2 \sim 3$ mm大の円礫チヤートを少量含む。縄文時代遺物を含む。

6層：褐色土（湿度が高い） $\phi 2 \sim 3$ mm大の円礫チヤートを少量含む。縄文時代遺物を含む。

7層：9層中に地山土を褐色土（湿度が高い） $\phi 2 \sim 3$ mm大の円礫チヤートを少量含む。縄文時代遺物を含む。

遺物群A

a 褐色土。底部にコングリートが埋められる。 $\phi 2 \sim 20$ mm大の円礫チヤートを少量含む。砂質がある。

b 褐色土（やや空気感がある） $\phi 2 \sim 3$ mm大のチヤート円礫を少量含む。

遺物群B

a 褐色土（やや空気感がある）蒸らみ強い。山砂が混入している。

b 褐色土。山砂中心の土層。山砂に粘りしまりりともやや有り。

c 褐色土。コングリートを含む。 $\phi 10$ mm大の炭化物を少量含む。

d 淡褐色土（やや空気感がある）粘性しまりりともやや有り。

遺物群C

濁水質土質層方層土

褐色土（やや空気感がある） $\phi 2 \sim 3$ mm大の円礫チヤートを少量含む。



写真IV-9 東西トレンチ南壁

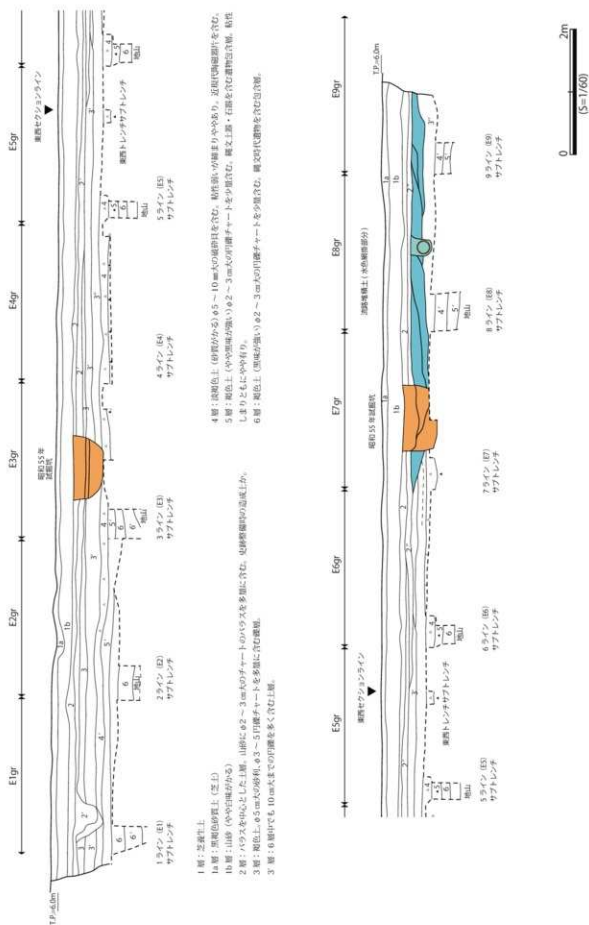


写真IV-10 南北トレンチ東壁



写真IV-11 石冠土状況

IV 令和3年度試掘調査の結果



図IV-5 令和3年度 南北トレンチ断面図

積した土層、4層は破砕貝を含む旧耕作土、5層は貝層及び貝層と同時期に堆積したと考えられる土層、6層は貝層より下位の土層としてとらえた。

2層上面が昭和55年施設整備の段階で整地を行なった面と考えられるが、この面を壊して掘り込まれた施設を2基確認した。下面に養生のためのブルーシートが敷かれていたため、かつての試掘坑であると判断した。1980年度調査の報告書(伊藤正人他2018)では、1979～80年の試掘調査地点が示されており(28頁図2-1)、その中で「実施の有無を含めて詳細不明」とされている試掘坑がいくつか示されているが、そのうち2か所が史跡範囲の東端にかかって設定されている。競技場の解体工事が進んだ段階で、情報提供があり、試掘を実施したのちに発掘調査に移ったとの記録があり、これを裏付ける状況であった。

このほか東西トレンチでは太い陶製管を埋設して排水管やレンガ組を伴う施設を2基確認している。切りあい関係を見てみると、陶製管の暗渠→レンガ組建物B→レンガ組建物Aの順が追える。この施設の性格は分らないが、溝掘りを行ない砂利を敷設したうえでレンガを敷きならべていることから、それなりの規模の施設と考えられる。年代に関わる情報は少ないが、使われているレンガの質が悪く、戦時中もしくは戦後間もなくの所産と考えられる。

この建物の情報は写真や地図にも残っていないため詳細は分からないが、史跡の指定後、昭和25年のスタジアムスタンド建設で貝層が大きく損なわれていることがわかっている。昭和16年の史跡指定後、短期間のうちに整地範囲が不明確となっている中で、戦中戦後の時期の可能性ある施設が確定測量範囲内に残されていることは、史跡の位置認識がどのように推移したかを考える上では重要な情報かもしれない。

・令和3年度調査トレンチの土器類

今回の発掘調査では、貝層の上面精査までで作業を留めたため、図示した資料はそのほとんどが南北トレンチの1～9区のサブトレンチを掘削した際に回収した遺物と、東西トレンチの深掘り部分から出土した遺物である。

大曲輪貝塚の貝層は1980年調査の出土資料等から、前期後半（おかしらかわ）の北白川下層Ⅱ式期を中心とした時期で、前期初頭（おじよ）の木島式などの東海系土器も一定量出土している。また晩期初頭の住居跡も残されており、土器棺として検出された土器のほとんどが、晩期初頭（おとせ）の元刈谷式期のものである。

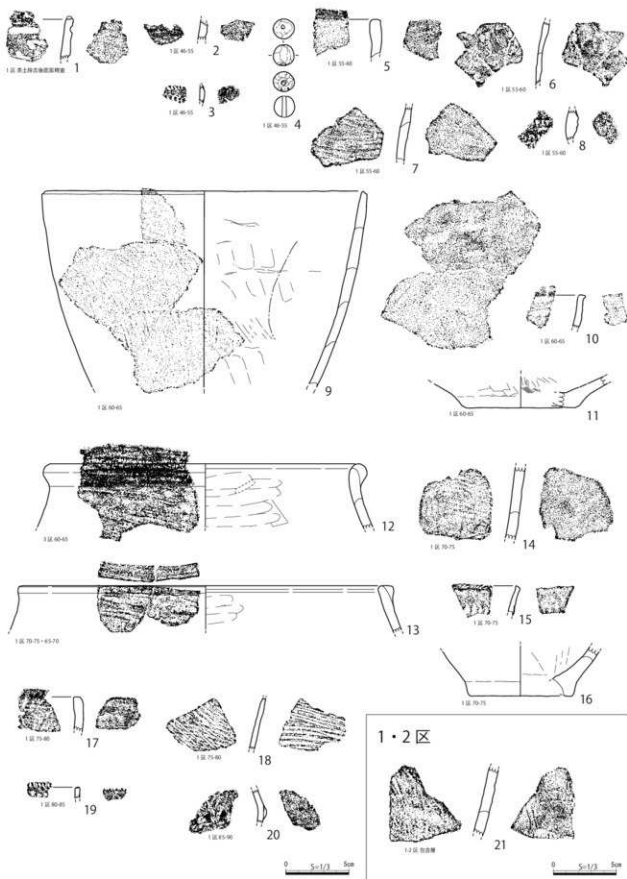
土器は図Ⅳ-6から図Ⅳ-9に示した。基本的にグリッドで掘削深度ごとのまとまりとして、図示した。今回の調査ではサブトレンチから細石刃が出土するなど、これまで知られていなかった時期の生活痕跡が残されていることが判明している。

図示した資料に確実に縄文時代早期まで遡るものはないが、前期でも古手の貝殻条痕を付した薄手硬質な土器が1区トレンチ底などでまとまって出土している。今回の調査では貝層を直接掘削していないこともあってか縄文時代前期の土器は総じて少ない。中期・後期の土器も散見されるがやはり晩期前半の土器の占める割合が高い。後期末の寺津下層式も見られる。特に量が多いと考えられるのは晩期初頭、元刈谷式土器を中心したものである。一部に大型破片も認められることから土器棺由来の破片である可能性も考えられる。

土器では特に1トレンチ付近で縄文時代晩期でも新しい時期の土器がまとまって出土していることが注目される。これまで晩期後半の土器は非常に少ない。また4層上面から70cm以下からの出土となっており、遺跡の成立を考える上で重要な資料となる。

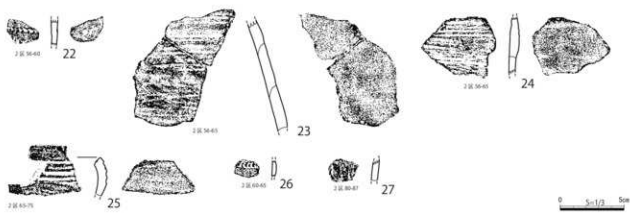
IV 令和3年度試掘調査の成果

1区



図IV-6 令和3年度 出土遺物(土器)実測図1

2区



3区



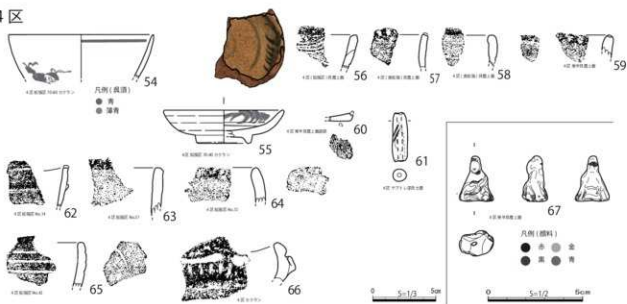
図IV-7 令和3年度 出土遺物(土器)実測図2

・令和3年度調査トレンチの石器

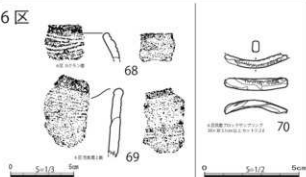
先に述べたように、史跡指定範囲の芝生部分にT字形のトレンチを設定し調査した。表土層除去後、遺物包含層上面の検出作業を行ない、南北トレンチを1～9区、東西トレンチをA～D区に区分し、各区で50cm 平方の深さ5cm ずつ包含層(混泥土層など)を上から順に回収した。持ち帰った土は、水洗作業により微細な骨片、土器片、石器片などを検出した。ここでは、水洗作業で検出した石器のうち主要な

IV 令和3年度試掘調査の成果

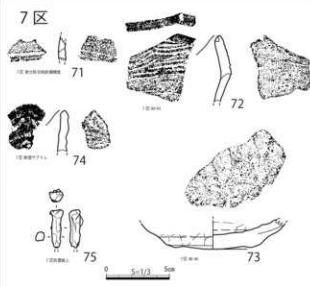
4区



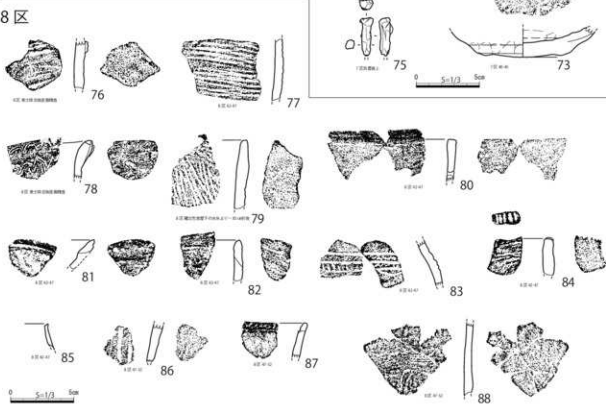
6区



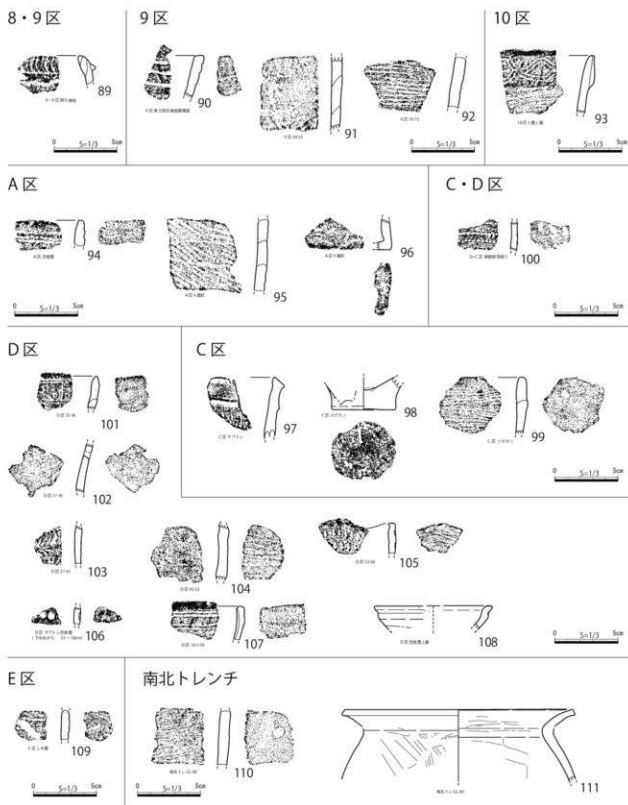
7区



8区



図IV-8 令和3年度 出土遺物(土器)実測図3



図IV-9 令和3年度 出土遺物(土器)実測図4

IV 令和3年度試掘調査の成果



写真IV-12 出土土器 1



写真IV-13 出土土器 2



写真IV-14 出土土器 3



写真IV-15 出土土器 4



写真IV-16 出土土器 5



写真IV-17 出土土器 6



写真IV-18 出土土器 7



写真IV-19 出土土器 8



写真IV-20 出土土器 9



写真IV-21 出土土器 10

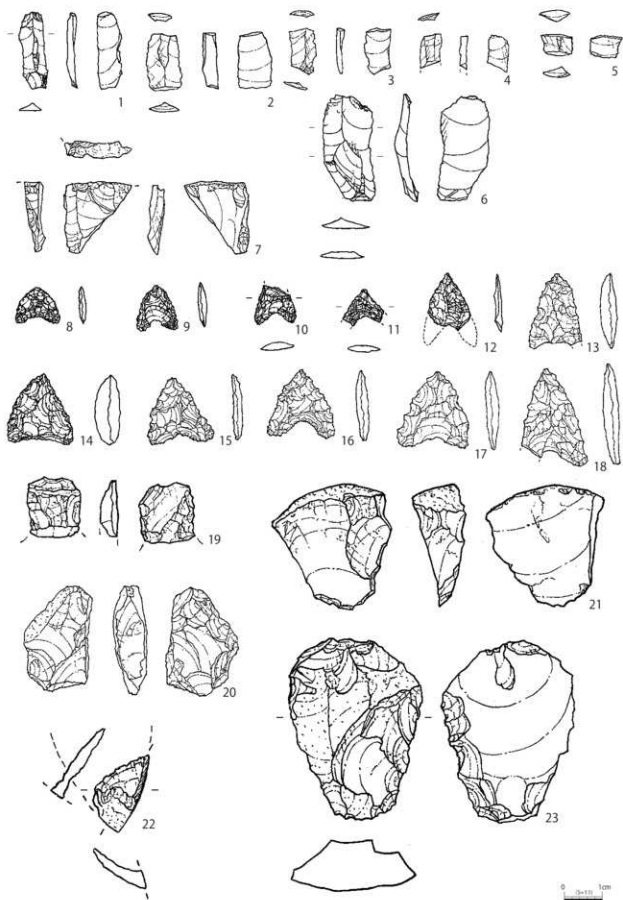
石鐮のほか、トレンチ内で掘削作業中に出土した比較的大型の石器類を図化した。

石器類の資料には、石鐮製作時に出土したとおもわれる微細な押圧剥離片（数ミリ大のものが多く、ここでは「石鐮チップ類」と呼ぶ）も700点ほど検出されている。製品の石鐮は、小さな破片を含めて40点ほど検出された。他に1cm前後のチップ（碎片）が少しあり、石核や剥片類は、比較的少ない状況であった。このうち、水洗作業で検出した石鐮のうち主要なもの32点抽出した。肉眼観察による石質は、20点がいわゆる「下呂石」、7点がチャート、6点がサヌカイトであった。なお石鐮チップ類では、未計測であるが下呂石が80%以上であるとおもわれる。

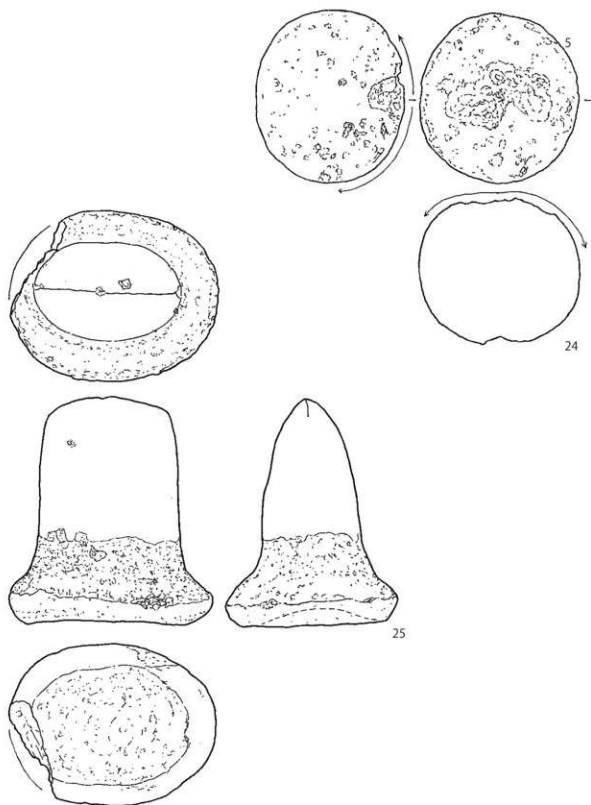
また、大曲輪遺跡では未確認であった旧石器時代末頃の細石刃および細石核（図IV-10-1～6）が検出されたことも、土壌水洗による大きな成果のひとつであった。その細石刃・細石核は、1～5区の範囲で出土した。現在のところ、大曲輪貝塚の地盤層は、第四紀層の八事層の礫層面とおもわれるが、大曲輪貝塚の形成時期には同じく更新世の熟田層面相当（4～5万年前頃）の土壌が当地にあり、旧石器時代の遺物が残されたものとおもわれる。これまで、大曲輪遺跡では、唯一の旧石器時代資料として細石刃文化に先行する時期のサヌカイト製の角錐状石器が1点出土している。石鐮は、小さな破片も含めると40点ほど検出された。実測図（図IV-10）の8～11の石鐮は、長幅サイズが1cm前後の小型品である。各区で特に出土数が多いということはない。石鐮チップ類も各区から検出されている。19の資料は、石匙のつまみ状突起の破片で、図化していないが、石匙の刃部とおもわれる小片も1点検出されている。20は、楔形石器で、他に2点ほど出土した。いずれも下呂石を使用している。21は、石核の残欠である。下呂石の円礫を原石としている。名古屋市内の遺跡では、下呂石のほとんどは、円礫を原石として使用するが、22のような下呂石の角礫表皮をつけたものも少数ながら出土する。22は、磨製石斧の刃部細片で、使用時の欠損品であろうか。24は、球形の叩石・凹石で、図示した矢印の面に赤色顔料が付着している。顔料の粉砕などに関係する痕跡とおもわれる。

25は、乳白色で透過性のある石英製の石冠である。石英の円礫を素材にしたとおもわれるが、石冠に使用する石質として石英を使用する例は珍しい。頭部の斧状刃部は、特に研磨が丁寧である。打撃痕はなく、底部は、楕円形にくぼんでいる。接地部（底部）付近も平滑に研磨されている。研磨部の仕上がりの違いが意味するところは、当石器の機能や使用法を考えるうえで注意される。26は、不整形の板状の石皿片とおもわれる。ある種の砥石かもしれない。27は、石英質の扁平な礫を使用した磨石・叩石・凹石の3機能を有する石器で、よく使われた状態である。28は、泥岩製の砥石で、側面3か所に削痕がみられるが、金属製の刃物で製品として切り出す際についたものか。時代は中世以降とみられる。（水野）

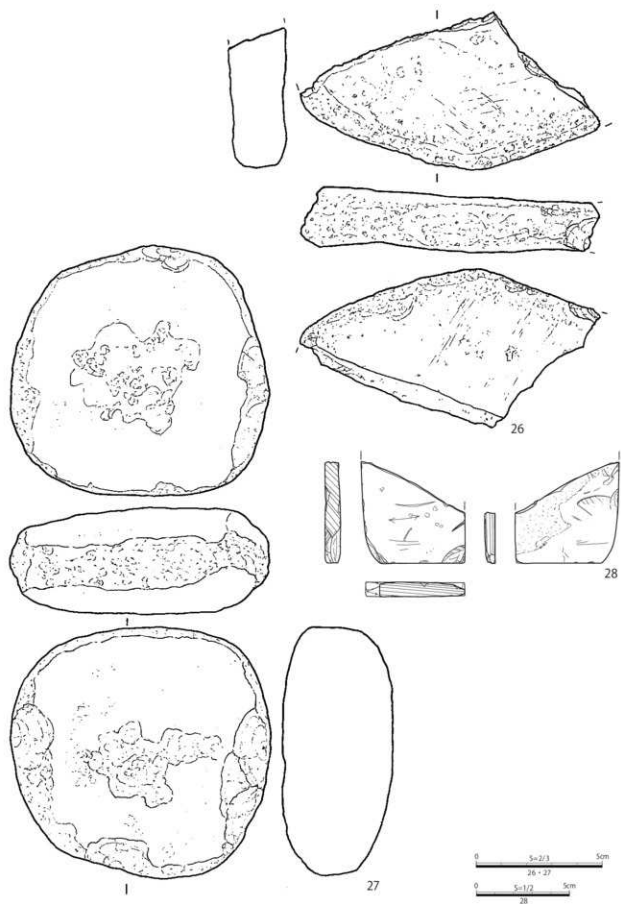
IV 令和3年度試掘調査の成果



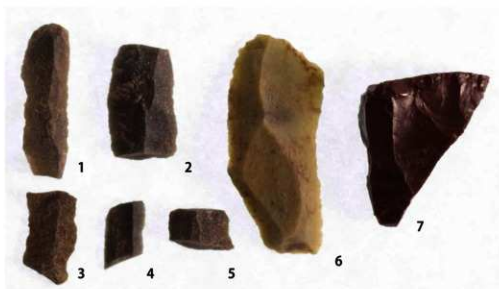
図IV-10 令和3年度 出土遺物(石器)実測図1



図IV-11 令和3年度 出土遺物(石器)実測図2



図IV-12 令和3年度 出土遺物(石器)実測図3



写真IV-22 出土石器 1



写真IV-23 出土石器 2



写真IV-24 出土石器 3



写真IV-25 出土石器 4



写真IV-26 出土石器 5



写真IV-27 出土石器 6

表IV-2 令和3年度 遺物観察表2(土器)

観測 番号	トレン チ番号	区	層位等	区分	器種	部位	寸法(mm)			形状等	遺器・成形・文様など	構成	胎土	色調	備考
							口 径	口 縁 高	深 さ						
45	Ⅱ区	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
46	Ⅱ区	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
47	Ⅱ区	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
48	Ⅱ区	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
49	Ⅱ区	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
50	Ⅱ区	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
51	Ⅱ区	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
52	Ⅱ区	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
53	Ⅱ区	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
54	Ⅱ区	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
55	Ⅱ区	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
56	Ⅱ区	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
57	Ⅱ区	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
58	Ⅱ区	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
59	Ⅱ区	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
60	Ⅱ区	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
61	Ⅱ区	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
62	Ⅱ区	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
63	Ⅱ区	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
64	Ⅱ区	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
65	Ⅱ区	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
66	Ⅱ区	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
67	Ⅱ区	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
68	Ⅱ区	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
69	Ⅱ区	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
70	Ⅱ区	6	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
71	Ⅱ区	7	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
72	Ⅱ区	7	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
73	Ⅱ区	7	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
74	Ⅱ区	7	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
75	Ⅱ区	7	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
76	Ⅱ区	8	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
77	Ⅱ区	8	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
78	Ⅱ区	8	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
79	Ⅱ区	8	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
80	Ⅱ区	8	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
81	Ⅱ区	8	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
82	Ⅱ区	8	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
83	Ⅱ区	8	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
84	Ⅱ区	8	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
85	Ⅱ区	8	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
86	Ⅱ区	8	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
87	Ⅱ区	8	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3

IV 令和3年度試掘調査の成果

表IV-3 令和3年度 遺物観察表3(土器)

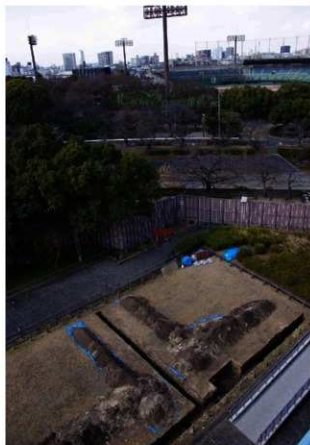
探検 トレン ド	区	集落等	区分	名称	部位	寸法(mm)			形状	用途・内容・文様など	構成	土色	備考
						高さ	径	厚					
88	南北	8	47.52	縄文	深鉢	胴部	6.2	7.0	-	内面：黒土、 内底：下ナ 内面：黒土(上層部)	中・黒	内径：2.0mm以下 外径：約2.0(1)・約 径2.0(2)程度	黒土・2.0mm以下(約10%) 白土・黒褐色を呈して (白土)を混在
89	南北	8・9	表土表層	縄文	深鉢	胴部	2.9	3.4	-	内面：上層(黒土)・下層(白土)・下層ナ 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土 内面：黒土ナ	良好	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
90	南北	9	表土表層 50.55	縄文	深鉢	胴部	3.2	2.1	-	内面：黒土 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	良好	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
91	南北	9	50.55	縄文	深鉢	胴部	6.2	4.9	-	内面：黒土 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	良好	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
92	南北	9	70.75	縄文	深鉢	胴部	4.5	5.7	-	内面：黒土(上層)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	中・黒	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
93	南北	10	5層上層	縄文	深鉢	胴部	4.8	5.2	-	内面：黒土(上層)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	良好	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
94	南北	A	4層中層D	縄文	深鉢	胴部	2.1	4.0	-	内面：黒土(上層)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	中・黒	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
95	南北	A	4層D	縄文	深鉢	胴部	0.0	5.8	-	内面：黒土(上層)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	中・黒	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
96	南北	A	4層D	縄文	深鉢	胴部	-	表1.2	表2.4	内面：黒土(上層)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	中・黒	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
97	南北	C	サマレ	縄文	深鉢	胴部	4.8	4.0	-	内面：上層(黒土)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	良好	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
98	南北	C	カクラン	縄文	深鉢	胴部	-	5.2	表1.2	内面：上層(黒土)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	中・黒	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
99	南北	C	カクラン	縄文	深鉢	胴部	4.8	5.3	-	内面：上層(黒土)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	中・黒	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
100	南北	D-C	カクラン	縄文	深鉢	胴部	3.1	3.4	-	内面：上層(黒土)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	良好	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
101	南北	D	37.45	縄文	深鉢	胴部	2.8	2.8	-	内面：上層(黒土)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	良好	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
102	南北	D	37.45	縄文	深鉢	胴部	4.3	4.3	-	内面：上層(黒土)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	良好	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
103	南北	D	37.45	縄文	深鉢	胴部	3.4	2.5	-	内面：上層(黒土)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	良好	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
104	南北	D	45.55	縄文	深鉢	胴部	4.7	4.4	-	内面：上層(黒土)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	中・黒	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
105	南北	D	55.98	縄文	深鉢	胴部	2.5	3.8	-	内面：上層(黒土)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	中・黒	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
106	南北	D	サマレ(上層) 4層D(下層) 50m	縄文	不明	胴部	1.1	2.4	-	内面：上層(黒土)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	良好	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
107	南北	D	50×50	縄文	深鉢	胴部	2.7	3.9	-	内面：上層(黒土)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	良好	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
108	南北	D	3層中層上層	縄文	土器	胴部	-	-	表1.2	内面：上層(黒土)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	良好	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
109	南北	E	1層中層	縄文	深鉢	胴部	2.8	2.6	-	内面：上層(黒土)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	良好	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
110	南北		55.80	縄文	深鉢	胴部	4.8	4.4	-	内面：上層(黒土)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	良好	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)
111	南北		55.80	縄文	深鉢	胴部	1.1	5.9	-	内面：上層(黒土)・下層(黒土) 内底：下ナ 内面：黒土 内面：黒土ナ	中・黒	内径：約1.0(2)以下 外径：約1.0(2)以下	黒土・2.0mm以下(約5%) 黒土・黒土(約5%) 黒土・黒土(約5%)

表IV-4 令和3年度 遺物観察表4(石器)

探検 トレン ド	区	集落等	名称	形状	石質	時期	特徴	備考
1	南北	4(食器区)	赤褐色土層上層クレーニング残土	磨石片	「下石」	旧石器	完全	220121
2	南北	1	50×50cm 水鉄-55～60cm	磨石片	「下石」	旧石器	両端折断	220119
3	南北	2	50×50cm 水鉄-60～65cm	磨石片	「下石」	旧石器	両端折断	220114
4	南北	1	50×50cm 水鉄-46～56cm	磨石片	「下石」	旧石器	下端折断	220114
5	南北	2	50×50cm 水鉄-56～60cm	磨石片	「下石」	旧石器	両端折断	220114
6	南内	サマレ(南北5区)	白層上層クレーニング残土	磨石片	チャート	旧石器	完全	220202
7	南内	1-2	縄文食器層(黒褐色土)出土	磨石片	チャート	旧石器	欠欠	220105
8	南北	3	50×50cm 縄文食器層上位よりその①	石鏝	チャート	縄文	小型	220105
9	南北	7	50×50cm 白層直上	石鏝	サマカイト	縄文	小型	220107
10	南北	3	50×50cm 縄文食器層上位よりその①	石鏝	チャート	縄文	小型	220106
11	南北	3	50×50cm 縄文食器層上位よりその②	石鏝	チャート	縄文	小型	220106
12	南北	3	50×50cm 縄文食器層上位よりその③	石鏝	サマカイト	縄文		220114
13	南北	2	50×50cm 水鉄-60～65cm	石鏝	サマカイト	縄文		220114
14	南北	3	50×50cm 縄文食器層上位よりその①	石鏝	「下石」	縄文		220106
15	南北	1	50×50cm 水鉄-55～60cm	石鏝	チャート	縄文		220117
16	南北	1	50×50cm 水鉄-55～60cm	石鏝	「下石」	縄文		220117
17	南内	サマレ(南北5区)	白層上層クレーニング残土	石鏝	「下石」	縄文		220202
18	南北	6	表土除去後白層出土	石鏝	「下石」	縄文		220126
19	南北	9	50×50cm 水鉄-45～50cm	石鏝	サマカイト	縄文	つまみ状突起部	220219
20	南北	1-2	縄文食器層(黒褐色土)出土	楔形石鏝	「下石」	縄文		220105
21	南北	1	50×50cm 水鉄-55～60cm	石鏝(塊状)	「下石」	縄文	片断表面	220117
22	南北	4(食器区)	サマレ(西層上層土層クレーニング残土)	磨製石片	磨製石片	縄文	短冊状	220121
23	南北	1-2	縄文食器層(黒褐色土)出土	磨製	「下石」	縄文	両端表面の付く断片素材	220105
24	南内	C-D	付添部上	卵石・卵石	安山岩	縄文	赤褐色付着(焼)の欠片	220200
25	南内	D	50×50cm(トレンチ北端、土層D層)	石鏝	石鏝	縄文	石鏝が素材と思われる	220203
26	南北		交点より北 CL-70cm	石鏝	石鏝	縄文	板状	212125
27	南内	D	50×50cm トレンチ北端縄文食器層直上	磨石・卵石	磨石(石質)	縄文		220203
28	南内	A	4層D	磨石	貫貫又は貫貫	中世以降	板状	



写真Ⅳ-28 調査区全景



写真Ⅳ-29 調査区と山崎川



写真Ⅳ-30 山崎川と下内田貝塚



写真IV-31 南北トレンチ表土除去後の状況



写真IV-32 作業風景



写真IV-33 東西トレンチ土層堆積状況



写真IV-34 南北トレンチ全景



写真IV-35 南北トレンチ4区拡張区掘り下げ作業



写真IV-36 南北トレンチ4区拡張区具層精査



写真Ⅳ-37 南北トレンチ4区拡張区具層



写真Ⅳ-38 南北トレンチ4区拡張区具層



写真Ⅳ-39 南北トレンチ5区具層検出状況



写真Ⅳ-40 南北トレンチ6区具層検出状況



写真Ⅳ-41 南北トレンチ7区具層検出状況



写真Ⅳ-42 南北トレンチ8区付近土層堆積状況



写真Ⅳ-43 南北トレンチ9区付近土層堆積状況



写真Ⅳ-44 東西トレンチ石冠出土状況



写真Ⅳ-45 東西トレンチ建物B付近土層断面



写真Ⅳ-46 有識者による現地指導



写真Ⅳ-47 埋め戻し作業



写真Ⅳ-48 復旧状況

Ⅳ-3 令和3年度調査成果のまとめ

・検土杖調査

今回の調査では新たな取り組みとして検土杖を用いた調査を実施した。大規模な掘削を伴わず包含層等の有無を確認できることは、特に史跡等の保全を図りながら調査を進めるうえで非常に有意な方法であるといえる。今回の調査でも、2m³前後の土壌回収に成功した。一方で、上面にバラスが敷設してある場合など、土の堆積状況によっては作業を進めることが困難となる場合もある。大曲輪貝塚・大曲輪遺跡の基盤層並びに包含層は、チャートを中心とした円礫を多量に包含しており、作業は非常に困難であった。

結果的に検土杖を折ることになってしまった。

ただ熟田台地上など、堆積環境がある程度把握されている場合は試掘や範囲確認調査の際に効果的に用いることができるかもしれない。

・貝層範囲の確認

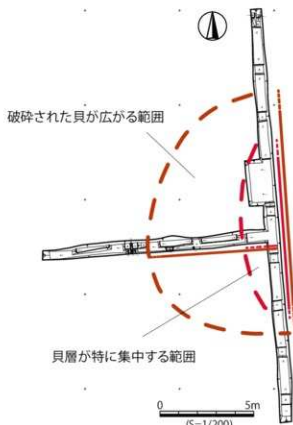
令和3年度の発掘調査では、大曲輪貝塚の基本的な情報や史跡範囲内において、遺構や貝層の残存状況を確認することを最大の目的として計画した。

今回の調査でも平成30年度に行なった20トレンチ、21トレンチによく似た土層の堆積状況を確認した。土層図(図IV-5)の4層とした土層が破砕貝を伴う近世耕作土、5層が貝層(混貝土層)にあたる。調査範囲の東側中央、E5グリッド付近を中心として、西へ行くほど貝の量が減少する状況が確認された。混貝土は厚いところでも20cmほどの厚さで確認され、今回のトレンチ範囲は貝層の西端をとらえた形となった。貝層に伴う土層は縄文時代前期と晩期初頭のものが中心であった。貝層の水洗データ等からも貝層がプライマリな堆積でないことは明らかではあるが、史跡範囲内での貝層の遺存状況を確認できた意味は大きい。

調査では4区拡張区で貝層上面での3次元測量データの作成やビデオカメラによる映像記録化も進めた。今後の史跡整備に合わせて、広く情報発信を進めるための基礎データを蓄積することができたのも今回の調査の大きな成果といえよう。

・出土遺物の傾向

今回の調査は、史跡指定範囲内ということもあり、貝層の掘削は最低限に留めるように作業をすすめた。一方で等間隔に設定したサブトレンチの中で、貝層が確認されなかった地点については人工層位を設定して掘削土を一定の厚さごとに回収しながら地山まで掘削を進めた。現地での調査終了後、回収した掘削土について水洗選別を行なったところ、矮小なサブトレンチの範囲であるが、旧石器時代末の細石刃や、縄文時代晩期末の土器などを確認できた。貝層に伴って出土する土器はこれまで通り縄文時代前期、北白川下層Ⅱ式段階の土器や晩期初頭の土器がほとんどであったが、周辺の包含層に幅広い時代の遺物が包蔵されていることが改めて確認された。特に旧石器時代関連の遺物については、これまで角錐状石器などは出土していたものの量的には限られたものであった。今回非常に狭い範囲の調査の中で細石刃および細石刃核が確認されたことは大曲輪貝塚・大曲輪遺跡の土地利用史を考える上で非常に大きな成果であったといえる。



図IV-13 混貝土層の推定範囲

V 令和4年度調査の成果

V-1 令和4年度調査の経過

令和4年度の調査は、競技場工事の施工計画の中でスタンドを支えるフーチング基礎のうちの4基が包含層に影響を与える可能性があったため、大曲輪遺跡の中央部南側部分で緊急発掘調査を実施した。

事務手続き

- 1月12日 1月12日付4教文第331号で文化財保護法第99条に基づく発掘調査を愛知県県民文化局文化芸術課文化財室(以下、県文化財室)に通知
- 2月6日 県文化財室より2月1日付4文芸2224号で文化財保護法第99条埋蔵文化財発掘調査の通知を受理
- 3月15日 3月15日付4教文第374号で埋蔵文化財発掘調査の完了報告票を県文化財室に提出
- 3月22日 3月16日付4文芸第2511号で埋蔵文化財発掘完了報告票を受理

調査経過抄

- 令和4(2022)年
12月23日(金) 調査箇所(S6-S9ラインのスタンド基礎箇所)の確認を行なう。なお、工事箇所に準じて調査区はS6-22A区、S7-22B区、S8-22C区、4.S9-22D区とする。
- 令和5(2023)年
1月10日(火) 機材準備・搬入、各調査区の範囲を確認。
1月12日(木) 調査開始。着手前の現況写真撮影。22A-D区全体について表土掘削及び包含層面を確認。
22A区:東壁断面撮影。包含層を基盤面まで掘削。
1月13日(金) 22A区:出土遺物取り上げ。
22B区:包含層掘削。
1月16日(月) 22B区:遺構面を確認。
22C区:金属管撤去の準備、22D区の高圧線スリーブの撤去。
1月17日(火) 22B区:礫混じりの溝遺構の精査。
22C区:金属管撤去。
22D区:包含層面の確認。
1月18日(水) 22A区:断面図実測。
遺跡周辺の仮設基準点の確認及び史跡の基準点の確認。
1月19日(木) 22C区:金属管撤去範囲について包含層を確認。
22D区:包含層掘削後、遺構面を確認。
1月20日(金) 22C区:遺構精査。
22D区:遺構掘削。
1月23日(月) 22C区:遺構掘削。
22D区:完了写真撮影。
工事立会範囲の位置測量用に仮設基準点4点を設置。
1月24日(火) 22B区:溝遺構の精査及び掘削。
22D区:完了写真撮影。
1月25日(水) 22B区:溝遺構の掘削。
1月26日(木) 22B区:溝遺構の掘削。遺物出土状況の撮影。土坑の精査。
1月27日(金) 22B区:溝遺構の掘削。土坑の掘削。降雪のため午後は屋外作業中止。
1月30日(月) 22A区:平面図作成。

	22B区：土坑の掘削。
1月31日（火）	22B区：土坑の掘削。溝遺構の遺物取り上げ。 22D区：断面図作成。
2月1日（水）	22B区：土坑の掘削。溝遺構の礎層の掘削。 22D区：断面図作成。
2月2日（木）	22B区：土坑の掘削。溝遺構の掘削。両遺構の切りあい断面図作成。 22C区：断面図作成。 調査区南に位置するラグビー場スタンドから調査区の遠景撮影。
2月3日（金）	22A区・22D区：平面図作成。 22C区：断面図作成。
2月6日（月）	22B区：遺物取り上げ。 22A区・22D区：平面図確認。
2月7日（火）	22B区：遺物取り上げ。遺物出土状況撮影。断面図作成。
2月8日（水）	各区図面類現地確認後、各区とも管路部材の撤去後に埋戻して調査完了。

V-2 令和4年度の調査成果

22A区から順に調査区ごとに遺構と遺物について記す。なお、22A～22D区の調査と並行して立会作業も行なったが、その際に確認した遺物も図示と観察表のみであるが掲載した。

22A区

調査区は上端で約5m×5mであるが、表層のRC（リサイクルコンクリート）が固く転圧された層（1層）で、小型重機で掘削する際の都合と厚く堆積したRC層のために、調査区の範囲が下端では4m×3.5mほどになっている。

本調査区はRC層とその下の造成土（2層・3層）が厚く堆積し、包含層及び基盤面を確認できたのは調査区東寄りの4m×1mの範囲に限られた。特に調査区西半部はRC層が厚く、造成土が包含層を浸潤していた（図V-2南面断面図参照）。東壁沿いに残っていた6層・7層が遺物包含層に該当し、6層の上部から天目茶碗の底部が出土した（図V-6-1）。この他、6層・7層からは少量の土器片が出土したが、図化・時期比定できるほどのものではなかった。また、基盤面（地山）は残存している範囲が狭く、遺構は確認されなかった。なお、基盤層面は北から南に向けて緩やかに傾斜している状況が確認された。

22B区

調査区は上端で約3.5m×4mであるが、表層がRCの固く転圧された層（1層）とコンクリート（2層）であったこと及び擁壁の基礎が埋設されていたことから、調査区の範囲が下端では2.4×2.9mほどである。加えて調査区内東端には、基盤層まで掘り込んだコンクリート製の排水管（ヒューム管）が埋設されていたため、実際の調査対象は1.6×2.9mの範囲に限られた。

表層の下には改良土（3層）が厚く堆積し、遺物包含層に相当する層はなく、改良土を除去した面で遺構が確認された（ただし調査当初は包含層として認識していた）。遺構は調査区北西部に位置する土坑（SK01）1基と調査区北東から南西の対角線に位置する溝（SD01）1条を確認した。

SK01は確認できた範囲では1.6×2.2mの規模で皿状に窪んだ隅丸方形を呈し、深さ0.3mを測る。北及び西側は調査区外に延伸し、全体の形状・規模は不明である。南西部はSD01に切られている。埋土は基本的に黒色土で（9層）、下部は部分的に灰褐色土が斑紋状にみられる（10層）。その下の11層は

V 令和4年度調査の成果

基盤層が混入しており、漸移層が、基盤層部分を掘りすぎている個所もある。出土遺物は縄文土器の深鉢の胴部片(図V-6-2・3)や底部片(図V-6-4・5)などが見られた。これらはいずれも小片で詳細な時期比定が困難なものであった。この他、土器の小片が若干出土した。遺構の時期は縄文時代よりも新しい時代の遺物は含んでいないことから縄文時代の土坑と考えられるが、時期は不明である。

SD01は確認できた範囲で幅1.6m、長さ2.3m、深さ0.5mを測る。北東側はヒューム管に切られ、南西側は調査区外に延伸している。調査当初、遺構の掘方を確認することができず、包含層として認識して掘り進め(図V-2断面図の5層部分)、平面図では溝の上部が掘削された後、基盤層を掘り込んだ掘方を図示しているため、幅が狭く見えている。SD01の堆積層は断面図の5～8層にあたり、この中で6層では小礫が多く含まれ、面的にも広がっていた(平面図ではSD01の破線で示された範囲)。出土遺物は5層から古瀬戸鉢(図V-6-6)、土鍾(図V-6-7)の他、近世陶磁器の小片が出土した。6層・7層からは山茶碗の碗底部(図V-6-8)、近世陶器の小皿(図V-6-9)・紅皿(図V-6-10)、皿(図V-6-11)、香炉(図V-6-12)、鍋(図V-6-13)、搥鉢底部(図V-6-14)、土鍾(図V-6-15)が出土したほか、小礫とともに陶器片が多く出土した。8層からは近世陶器の蓋(図V-6-16)などが出土した。出土遺物は古代・中世のものも見られるが、量的にもわずかで後世の混入と思われ、近世陶器が主体を占めていることから本遺構の時期は近世と考えるよからう。

22C区

調査区は上端で約3.5m×4mであるが、調査区東部に高圧電線のスリーブの接続用のコンクリート製のボックスが埋設されていたこと、及び表層がRCの固く転圧された層(1層)とコンクリート(2層)であったことから、調査区の範囲が下端では2×3.3mほどである。加えて調査区内西端には、基盤層まで掘り込んだコンクリート製の排水管(ヒューム管)が埋設されていたため、実際の調査対象は1.3×3.3mの範囲に限られた。狭い調査範囲となったが、表層の下には改良土が堆積し、その下には鋼管の埋設もあり、埋蔵文化財の所在が想定される土層はわずかであった。近現代の埋設などを除いた個所では調査区全体に黒色土が堆積し(8・11層)、時期不明の土器片が出土した。遺構はその下から調査区の北端と南端において土坑が確認された。両土坑とも2層の堆積層が確認され(SK02:9・10層、SK03:12・13層)、基盤層を掘り込んでいる。また、両土坑とも調査区外に及んでいることから形状は不明で、遺物は出土しなかった。この他、調査区中央付近では不定形のピット(P1)と径15cmの円形の浅いピット(P2)が9層の上面で確認され、基盤層に及んでいる。遺物は出土しなかった。いずれの遺構も時期は不明である。

22D区

調査区は上端で約3.6m×3mであるが、表層にRCの固く転圧された層(1層)とコンクリート(2層)があり、調査区西部に高圧電線のスリーブの埋設に伴う造成土(3層)が見られ、基盤層にまで及んでいた。そのため、調査区の範囲が下端では2.5m×2.5mほどで、遺物包含層及び遺構が確認されたのは調査区東部に限られた。表層下には遺物包含層が堆積し(4・5層)、わずかに土器片などが出土した。5層の下では部分的に基盤面が確認され(11層)、南半部ではやや窪んだ個所が見られたが(13・14層)、形状や堆積状況などから遺構とは判断しなかった。一方、北半部では深さ0.6mほどで逆台形の断面を呈する窪みを確認した。遺物は出土していない。調査区外へ延伸しているため、全体の形状は不明である。自然流路か土坑と考えられる。埋土の土色や土質は22B区で確認されたSK01に類似していることや確認さ

れた標高・位置などから両者は近い時期に埋没した可能性が考えられる。

まとめ

今回の調査はスタジアムの基礎工事により失われる範囲で、既設建物や設備による攪乱がない、あるいは少ないと想定された区画で調査区が設定されたものであったが、当初の想定に加えて、表層にRCの固く軋圧された層（1層）やコンクリート（2層）があり、さらにコンクリート製の排水管（ヒューム管）・高压電線のスリーブなど多くの管路が埋設されていたことから、調査対象となった範囲が限定された。このような状況下において22Aでは遺構はなかったが、22B・22C・22D区では遺構が確認され、すべての調査区において遺物が出土した。今回の調査のなかでは22B区の調査成果が主要な成果となった。

SK01からは、本遺跡の主体を占める縄文時代の遺構の分布範囲が従来の知見よりもやや広がりを持つことが考えられよう。また、SD01からは今回の調査で確認できた範囲はひじょうに限定されたものであったが、近世の溝遺構が遺跡南部に広く敷設されていた可能性が求められる材料を提供した。

また、各調査区の基盤面が確認された標高を見ていくと、22A区:5.2～5.3m、22B区:5.2m、22C区:5.2m、22D区:5.3mとなっており、遺跡範囲全体としては北東から南西に向けて自然地形が緩やかに傾斜しているものの、当該調査区付近は基盤面が比較的平坦であったことがわかった。



写真V-1 出土遺物1

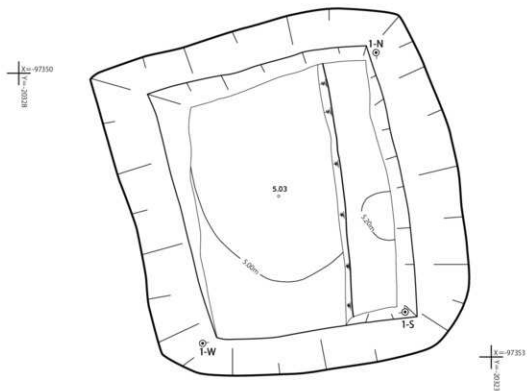


写真V-2 出土遺物2



写真V-3 出土遺物3

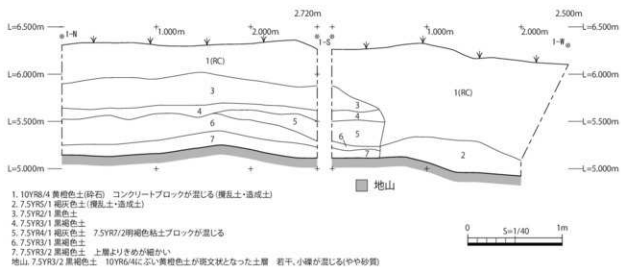
22A区



22A区

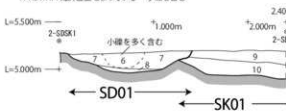
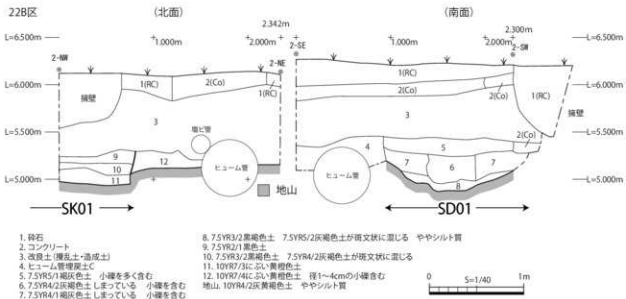
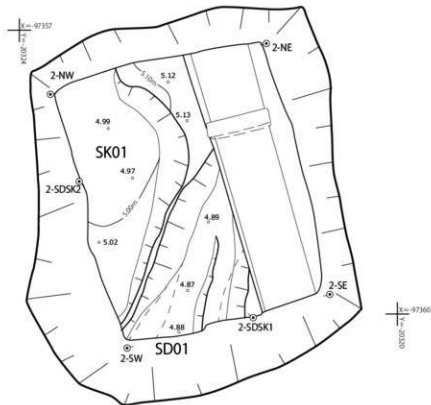
(東面)

(南面)



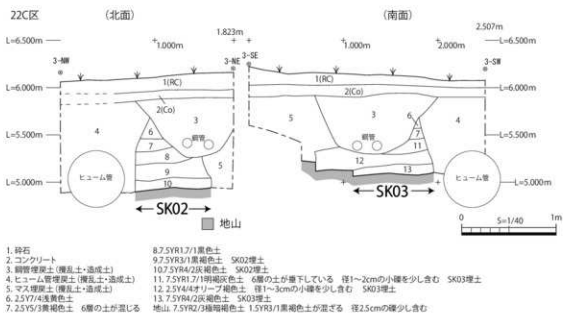
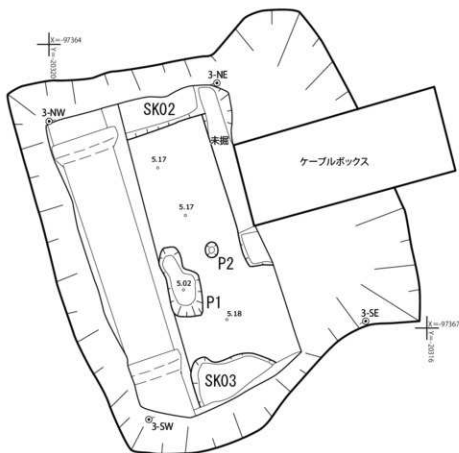
図V-1 令和4年度 22A区 平面図・断面図

22B区

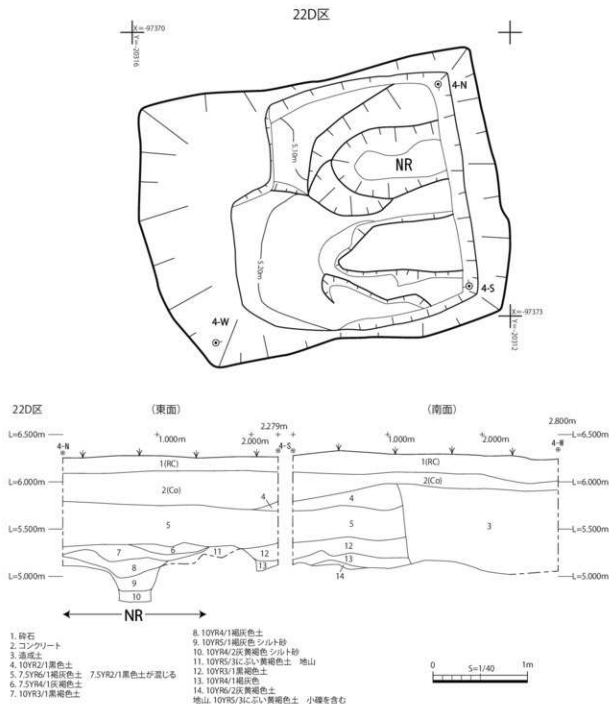


図V-2 令和4年度 22B区 平面図・断面図

22C区



図V-3 令和4年度 22C区 平面図・断面図



図V-4 令和4年度 22D区 平面図・断面図

表V-1 令和4年度 遺物観察表1(土器類・土製品・鉄製品)

調査区	調査区	層位等	区分	遺物	部位	寸法(mm)			保存率	調査・使用・文様など	焼成	胎土	色調	備考
						縦	横	厚						
1	22B	207m	陶器	式目500	底面	-	縦 140	横 1.9	1/10	内・外底、内底・外底の 両面「3」の文字	黒灰	黒灰	黄(2.5YR5/2)	古瀬戸物、内底に「3」の文字
2	22B	207m	縄文	深鉢	胴部	2.2	3.1	-	1/10以下	内底「3」の文字	黒灰	中黄	紅(2.5YR5/4)	
3	22B	207m	縄文	深鉢	胴部	4.0	6.3	-	1/10以下	内底「3」の文字	黒灰	中黄	紅(4.0YR5/2)	縄文土、内底に「3」の文字
4	22B	207m	縄文	深鉢	底面	-	横 1.4	1/10以下	内・外底「3」の文字 内底「3」の文字	中黄・黒灰	中黄	黄(2.5YR5/2)	内底に「3」の文字	
5	22B	207m	縄文	深鉢	底面	-	縦 16.0	横 2.7	1/10	内底「3」の文字	黒灰	黒	黄(2.5YR5/1)	内底に「3」の文字
6	22B	207m 1.8m	陶器	鉢	胴部	-	縦 2.6	1/10以下	内・外底「3」の文字、 内底「3」の文字	中黄・黒灰	中黄	黄(2.5YR5/2)	内・外底に「3」の文字	
7	22B	207m 1.8m	土製品	土鍋	土鍋	縦 4.5	横 1.4	高さ 1.0	ほぼ100%	内底「3」の文字	黒灰	黒	黄(2.5YR5/2)	内底に「3」の文字
8	22B	207m 4-1.8m	山形器	皿	底面	-	縦 18.1	横 1.7	1/4	内底「3」の文字 内底「3」の文字、内底「3」の文字 (内底)「3」の文字	黒灰	中黄	黄(2.5YR5/2)	内底に「3」の文字

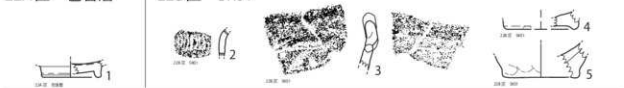
V 令和4年度調査の成果

表V-2 令和4年度 遺物観察表2(土器類・土製品・鉄製品)

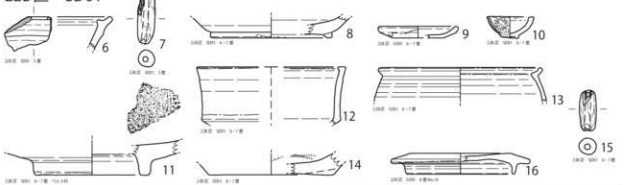
発掘 番号	調査 区	発掘 層位	区分	遺物 種別	単位	正数 (n)			保存率	調整・使用・文様など	焼成	胎土	色調	備考
						検 出 数	測 定 数	破 損 数						
9	22B	400-1層	陶器	小皿	1編年-6編年	13	10.2	破 4.2	3.0	1/4	内面・外面 10線ナシ・厚縁 内面 10線ナシ厚縁	黒灰	黒(12.5500/2)	
10	22B	400-1層	陶器	煎釜	1編年-6編年	13	10.0	破 1.0	1.1	3/2	内面 10線ナシ厚縁 外面 10線ナシ厚縁	黒灰	黒	高台-煎釜類
11	22B	400-1層	陶器	磁石鉢小	煎釜	-	破 0.1	残 2.8	1/5	内面 10線ナシ厚縁 外面 10線ナシ厚縁	黒灰	黒(15.85/2)	内面縁-煎釜	
12	22B	400-1層	陶器	煎釜西か	1編年-6編年	-	-	残 5.9	1/10	3/3	内面 10線ナシ厚縁 外面 10線ナシ厚縁	黒灰	黒(12.5500/2)	1編年煎釜より大
13	22B	400-1層	陶器	行平鍋	1編年-6編年	17	13.0	-	残 2.7	1/10	内面 10線ナシ厚縁 外面 10線ナシ厚縁	黒灰	黒(10.9500/3)	内面縁の内縁より大
14	22B	400-1層	陶器	煎釜	煎釜	-	破 10.0	残 1.7	1/5	内面 10線ナシ厚縁 外面 10線ナシ厚縁	黒灰	黒(12.5500/2)	内面縁-煎釜	
15	22B	400-1層	土製品	土製品	土製品	10	3.2	破 1.4	1/5	山吹色 コシチヤ	黒灰	黒(12.5500/2)	器底に土質の凹凸を認められ	
16	22B	400-1層	陶器	蓋	1編年-6編年	13	10.4	破 10.0	残 0.4	1/5	内面 10線ナシ厚縁 外面 10線ナシ厚縁	黒灰	黒(12.5500/2)	
17	立会	3層	縄文少体生	深鉢	煎釜	-	破 17.4	残 3.1	1/5	内面 10線ナシ厚縁 外面 10線ナシ厚縁	黒灰	黒(12.5500/2)		
18	立会	3層	縄文	深鉢	1編年	2.3	3.7	-	1/10	3/3	内面 10線ナシ厚縁 外面 10線ナシ厚縁	黒灰	黒(12.5500/2)	器底に土質の凹凸を認められ
19	立会	3層	縄文	深鉢	1編年	3.2	4.2	-	1/10	3/3	内面 10線ナシ厚縁 外面 10線ナシ厚縁	黒灰	黒(12.5500/2)	
20	立会	3層	縄文	深鉢	煎釜	5.5	3.7	-	1/10	3/3	内面 10線ナシ厚縁 外面 10線ナシ厚縁	黒灰	黒(12.5500/2)	
21	立会	3層	縄文	深鉢	煎釜	5.4	3.4	-	1/10	3/3	内面 10線ナシ厚縁 外面 10線ナシ厚縁	黒灰	黒(12.5500/2)	内 差し口部
22	立会	3層	縄文	深鉢	煎釜	7.0	5.9	-	1/10	3/3	内面 10線ナシ厚縁 外面 10線ナシ厚縁	黒灰	黒(12.5500/2)	内 差し口部
23	立会	3層	縄文少体生	深鉢少体生	煎釜	3.2	3.8	-	1/10	3/3	内面 10線ナシ厚縁 外面 10線ナシ厚縁	黒灰	黒(12.5500/2)	
24	立会	3層	縄文少体生	煎釜	煎釜	-	-	残 2.2	1/10	3/3	内面 10線ナシ厚縁 外面 10線ナシ厚縁	黒灰	黒(12.5500/2)	内面縁部
25	立会	3層	縄文少体生	(中形)	煎釜	煎釜	3.3	-	残 3.3	1/5	内 外面 10線ナシ	中平灰	黒(12.5500/2)	胎土に土質の凹凸を認められ
26	立会	3層	煎釜	煎釜	煎釜	-	-	残 3.1	1/10	3/3	内 外面 10線ナシ	黒灰	黒(12.5500/2)	
27	立会	3層	煎釜	煎釜	煎釜	煎釜	煎釜	煎釜	煎釜	煎釜	煎釜	煎釜	煎釜	煎釜

22A区 包含層

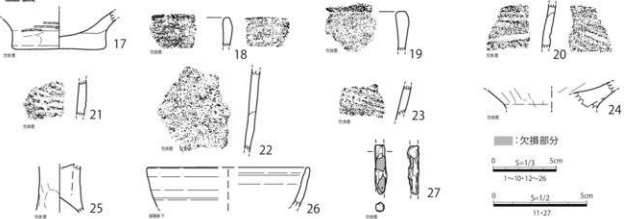
22B区 SK01



22B区 SD01



立会



図V-5 令和4年度 出土遺物(土器類・土製品・鉄製品)実測図



写真V-4 22A区確認状況 西から



写真V-5 22A区 東壁 西から



写真V-6 22B区確認状況 東から



写真V-7 22B区 SD01 上面確認状況 北から



写真V-8 22B区 SD01 確認状況 北東から



写真V-9 22B区 SD01 遺物出土状況 北西から



写真V-10 22B区 SD01 遺物出土状況



写真V-11 22BSD01・SK01断面 東から



写真V-12 22BSD01・SK01断面 北から



写真V-13 22B区完掘状況 北東から



写真V-14 22C区確認状況 西から



写真V-15 22C区 南壁 北から



写真V-16 22C区完掘状況 北西から



写真V-17 22D区 完掘状況 南西から



写真V-18 22D区東壁 西から

VI 令和3・4年度民間調査機関委託分の成果

VI-1 調査経過および成果の概要

名古屋市瑞穂公園陸上競技場整備等事業を行なうにあたり、計画地は大曲輪遺跡及び下内田貝塚の周知の埋蔵文化財包蔵地に該当、近接することから、本事業の発注者である名古屋市スポーツ市民局スポーツ推進部スポーツ施設室と施工者の株式会社竹中工務店名古屋支店、文化財保護室で協議の結果、本事業の影響を最小限に留めるため、範囲確認調査を行なうこととした。実際の範囲確認調査については、竹中工務店から民間調査機関である株式会社二友組に委託され、下記の体制及び期間等で調査が行なわれた。

監督員	藤瀬茂・眞鍋直子・林田愛実(名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室)
調査員	湯川善一・高木祐志(株式会社二友組)
測量員	安藤貢一・東江康弘・稲生貴仁(株式会社二友組)
現地調査	令和3年11月2日～令和3年12月23日(大曲輪遺跡・下内田貝塚) 令和4年3月14日～令和4年3月29日(下内田貝塚) 令和4年5月20日～令和4年5月24日(下内田貝塚)
調査面積	合計 223 m ² (大曲輪遺跡: 181 m ² 、下内田貝塚: 42 m ²)

上記の調査では、平成27年度～令和元年度の市実施の試掘調査のトレンチ名(1～40トレンチ)を踏襲し、大曲輪遺跡で42～45、50～84の計30トレンチ、下内田貝塚で46・49、85～95の計14トレンチ(87は拡張区を87.2とした)を掘削した(欠番: 41・43・53・54・56・59・70・71・73・77)。この調査結果については、高木祐志2022『名古屋市瑞穂公園陸上競技場整備等事業に伴う試掘調査報告書(大曲輪遺跡・下内田貝塚)』株式会社竹中工務店・株式会社二友組にて報告されたが、その調査の概略を再構成して述べる。

過去の調査より、この周辺地域では縄文時代から古代にかけての遺物包含層が確認されていた。遺物包含層は土師器・須恵器が多く含まれる上層と縄文土器が多く含まれる下層に分かれる場合もある。今回の調査の場合、大曲輪遺跡では、遺物を含んだ明確な包含層がほぼ確認できなかったものの、包含層と酷似した堆積を山崎川に近い北側部分と南西部分で確認できた。下内田貝塚では、山崎川に近い南東部分で縄文土器を含む包含層が確認でき、うち2箇所のトレンチで包含層と酷似した土色・土質の掘り込みが土層断面が観察できたが、限定的な確認であり遺構の可能性を指摘するに留まる。また、トレンチのほぼ全域でハイガイを主体とする貝類が多く出土しているものの、包含層以外からの出土も多く時期が明確となるものではない。

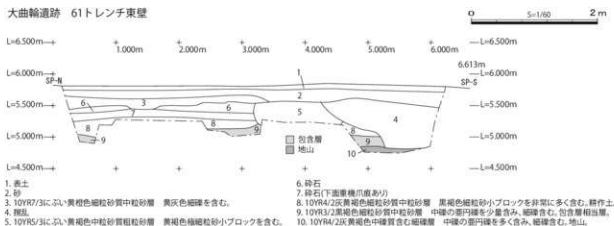
なお、陸上競技場建設やそれ以降のインフラ工事などで削平は受けているものの、褐色やにぶい黄褐色で礫交じりの砂層が主体の基盤層(八事層)が各所で確認できた。基盤層は大曲輪遺跡では東部が標高8.5～9.7mで北西部では4.6～4.8m、南西部では4.4～4.7mであり、南西方向へ緩やかに地形が下がると予想される。基盤層は下内田貝塚では、東部で標高6.1m、北部で5.3～5.5mで確認され、南部では遺物包含層のみの確認で地山まで達しなかったトレンチの最下層の標高が5.0～5.3mであり、細かい谷地形もしくは、遺構を遺物包含層と誤認した可能性がある。

遺物については、27リットルコンテナ1箱分出土しており、大半は下内田貝塚でその中には貝も多く

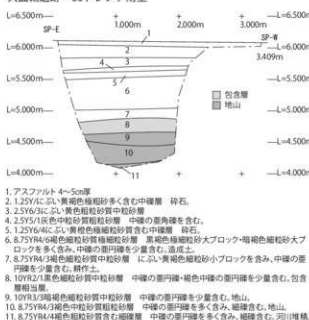
含まれる。小片の土器も極力図示した(図VI-2)。大曲輪遺跡・下内田貝塚ともに大半が縄文土器で、晩期前半の半截竹管文系の条痕土器、いわゆる下別所式～雷 II c式(元刈谷式)のものが多い。

大曲輪遺跡では旧耕作土や堆土から貝殻や縄文の押圧文を持つ縄文土器が出土している。また、弥生中期末～後期初頭の(仮称)見晴台式の甕口縁部(5)、古墳～古代の須恵器の甕(6)や器台(7)、東濃産とみられる灰釉陶器の甕(9:丸石2号～明和27号窯式)が出土した。下内田貝塚では、南東部の87トレンチ(拡張区含む)からの出土量が多く、口縁と複数並行する凹線文と縄文の押圧文をもつ破片が3点(13・16・17)出土した。破片接合はしなかったが同一個体の可能性もある。そのほかも12・19など半截竹管文を施文されたものが多い。46トレンチで出土した台付甕の脚部(11)は高級式～山中式以降と考えられる。

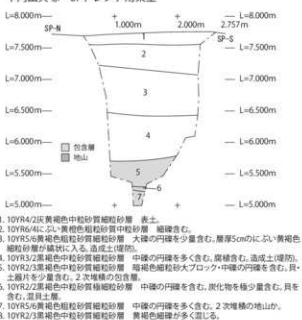
大曲輪遺跡 61トレンチ東壁



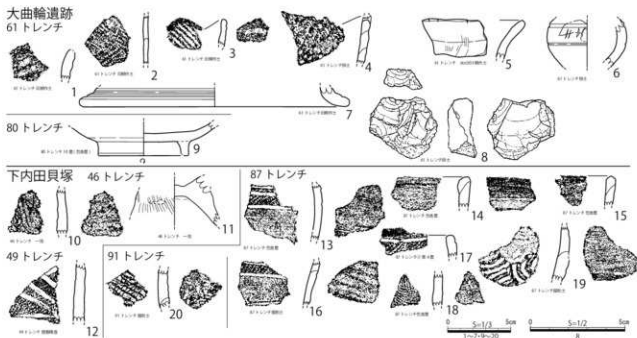
大曲輪遺跡 66トレンチ南壁



下内田貝塚 87トレンチ南東壁



図VI-1 令和3・4年度 試掘調査地点断面図



図Ⅵ-2 令和3・4年度 出土遺物実測図(土器類・石器)

表Ⅵ-1 令和3・4年度 遺物観察表(土器類・石器)

順数 番号	トレン チ番号	遺物 種別等	区分	形状	図記	法量(mm)			保存 状況	調査・成形・文様など	焼成	胎土	色調	備考		
						長さ	幅	厚								
1	61	大曲輪	日野作土	陶文土器	鉢	100年	2.8	3.1	-	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(2本)	中年代(1) 20cm以下の中年代(古)	内・外、黄褐色(古) 白(新)	20211130		
2	61	大曲輪	日野作土	陶文土器	鉢	新製	3.9	3.6	-	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(陶文)	良好	内・外、黄褐色(古) 白(新)	20211130		
3	61	大曲輪	日野作土	陶文土器	鉢	100年	2.1	2.9	-	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(2本)	中年代	黄	20211130		
4	61	大曲輪	日野作土	陶文土器	深鉢	新製	4.2	5.4	-	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(陶文)	中年代	黄	20211203		
5	61	大曲輪	日野作土	陶文土器	鉢	100年	3.9	5.0	-	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(2本)	不発	中年代(1) 20cm以下の中年代(古)	内・外、黄褐色(古) 白(新)	20211103	
6	61	大曲輪	日野作土	陶文土器	深鉢	新製	6.3	-	3.8	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(陶文)	良好	内・外、黄褐色(古) 白(新)	20211103		
7	61	大曲輪	日野作土	陶文土器	碗	100年	-	-	20.8	残1.6	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(2本)	不発	中年代(1) 20cm以下の中年代(古)	内・外、黄褐色(古) 白(新)	20211130
8	61	大曲輪	日野作土	陶文土器	碗	100年	-	-	-	-	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(2本)	不発	中年代(1) 20cm以下の中年代(古)	内・外、黄褐色(古) 白(新)	20211203
9	80	大曲輪	日野作土	陶文土器	鉢	新製	-	-	残17.2	程度 不足	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(陶文)	良好	黄	内・外、黄褐色(古) 白(新)	20211122
10	46	下内田	貝塚	陶文土器	深鉢	新製	3.7	3.5	-	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(陶文)	良好	中年代(1) 20cm以下の中年代(古)	内・外、黄褐色(古) 白(新)	20211121	
11	46	下内田	貝塚	陶文土器	行付器	新製	-	残16.8	残19.9	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(陶文)	中年代	中年代(1) 20cm以下の中年代(古)	内・外、黄褐色(古) 白(新)	20211121	
12	49	下内田	貝塚	陶文土器	深鉢	新製	5.0	4.2	-	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(陶文)	良好	黄	20211130		
13	87	下内田	貝塚	陶文土器	深鉢	新製	4.7	4.4	-	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(陶文)	良好	黄	20202015		
14	87	下内田	貝塚	陶文土器	深鉢	100年	3.7	4.2	-	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(陶文)	良好	黄	20202015		
15	87	下内田	貝塚	陶文土器	深鉢	100年	2.5	2.7	-	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(陶文)	良好	中年代(1) 20cm以下の中年代(古)	内・外、黄褐色(古) 白(新)	20202015	
16	87	下内田	貝塚	陶文土器	深鉢	新製	3.7	4.4	-	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(陶文)	良好	黄	20202015		
17	87-2	下内田	貝塚	陶文土器	深鉢	100年	1.9	3.8	-	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(陶文)	中年代	中年代(1) 20cm以下の中年代(古)	内・外、黄褐色(古) 白(新)	20202014	
18	87	下内田	貝塚	陶文土器	深鉢	新製	2.9	2.6	-	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(陶文)	良好	黄	20202015		
19	87	下内田	貝塚	陶文土器	深鉢	新製	4.8	4.8	-	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(陶文)	良好	黄	20202015		
20	91	下内田	貝塚	陶文土器	深鉢	新製	3.4	3.7	-	わずか	陶文: コシナギナガ 陶文: 上段にコシナギナガ、下段に陶文(陶文)	中年代	中年代(1) 20cm以下の中年代(古)	内・外、黄褐色(古) 白(新)	20202018	



写真VI-1 61トレンチ断面 南西から



写真VI-2 61トレンチ遺物(5)出土状況 南から



写真VI-3 66トレンチ断面 北東から



写真VI-4 66トレンチ完掘状況 東から



写真VI-5 87トレンチ断面壁 北西から



写真VI-6 87トレンチ下半断面 西から



写真VI-7 出土土器 1



写真VI-8 出土土器 2・石器

VII 自然科学分析

VII-1 大曲輪貝塚(令和3年度サンプル)出土の貝類・魚類について

新美倫子(名古屋大学博物館)

村木望子・林田愛美(名古屋市教育委員会)

大曲輪貝塚の令和3(2021)年度の調査では、貝類と魚類の出土内容を定量的に明らかにするために、調査区の2ヶ所で柱状ブロックサンプルが採集された。ブロックサンプルは、発掘調査時に貝層上面を検出した段階で、貝層の堆積状況が良好と思われる地点を5区で1ヶ所、6区で1ヶ所選んで採集された(図VII-1)。なお、この貝層に含まれる動物遺体には縄文時代前期のものと晩期(主に元刈谷式の時期)のものが混在しており、前期のものの方が多いとのことである。

サンプルの採集区はそれぞれ30cm×30cmとし、貝層を上から約5cmずつ土ごと採集し、採集されたサンプルは上から順にカット①・カット②・・・とした。貝層上面から地山直上まで、5区では10カット、6区では7カットが採集されている。そして、各カットからそれぞれ2リットルを無作為に抽出し、1mm目の篩で水洗選別を行なった。これらから出土した動物種名を表VII-1に、出土内容を表VII-2および3に示した。

1 貝類(表VII-2)

貝類は5区と6区のブロックサンプルの合計で131点出土した。全体に保存状態がかなり悪く、サンプルの量の割には出土点数が少ない。なお、5区のカット②と6区のカット③においては、それぞれから抽出した2リットルと残りの全量とを別々に水洗選別し、両者に含まれる貝類の種ごとの割合に大きな齟齬はないことを確認している。

種ごとの最小個体数ではアカニシが38個体で最も多く、次に多いのはハマグリ21個体であり、ハイガイ19個体、ウミナシ・ヘナタリ類6個体、オキシジミ3個体、オオノガイ・マガキ・シオフキが各1個体と続く。芯が残っていないのでカウントはしていないが、6区のカット②ではツメタガイ類の破片も含まれていた。また、ブロックサンプルからは出土していないイボウミナシとヤマトシジミについても、発掘区では出土したので表VII-1の出土動物種名に含めた。

アカニシは芯の中でも軸唇部分が残存するものをカウントした。多くの資料は軸唇部のみが残存していたためはっきりしないが、殻高10cm以下の個体が多く、それより大きいものは少数と思われる。アカニシが最も多くなったのは、発掘時に貝層中でしばしば確認されたアカニシのブロックがサンプル採集区と重なっていたためかもしれない。ハマグリはすべての資料が壊れており、加えて多くの資料は殻頂部のみとなっていて殻長が計測できなかったが、4cm以下の小さな個体が大半であろうと思われる。焼けた資料も含まれていた。

ハイガイは資料の7割ほどで殻長の計測が可能であった。殻長3～4cmの個体が最も多かったが、4～5cmの個体もかなり多い。殻長2～3cmの個体も少量見られ、5～6cmの個体は1点のみであった。ウミナシ・ヘナタリ類は芯の下端が残っている個体を数えたが、保存状況が悪くウミナシ類かヘナタリ類

Ⅶ 自然科学分析

かの区別ができないものが多いので、ウミナナ・ヘナタリ類としてまとめた。これらには少なくともウミナナとカワアイガイが含まれていた。オキシジミは殻頂部のみとなった資料が多いが、殻長 3.5～4cm 程度と確認できた資料も 1 点あった。オオノガイとマガキは殻頂部のみが残っていたが、マガキの殻頂部は殻高 10cm 程度の個体と推測される。マガキはサンプル中に焼けた破片も見られた。シオフキは殻長 3～4cm の個体である。

2 魚類 (表Ⅶ-3)

2つの柱状サンプルのうち、ここでは分析が終わった 6 区のサンプルについて内容を報告する。5 区のサンプルについては、令和 6(2024) 年度刊行予定の大曲輪遺跡の自然科学分析編の報告書でその内容を報告したい。

6 区の柱状サンプルの 7 カットのうち、魚類はカット①からカット⑥までで出土し、カット⑦では出土しなかった。カット①～⑥からは計 76 点の同定可能な資料が出土し、その中にはアイゴ類が最も多く 19 点見られた。ついでイワシ類が 10 点、エイ類が 9 点、カレイ類・アジ類・フグ類がそれぞれ 4 点ずつ、サバ類が 3 点、カナガシラ類? が 2 点、ウナギ・アイナメ類・サヨリ類・スズキが各 1 点ずつ、種不明が 17 点出土した。

アイゴ類は上層のカット①・②のみで出土し、椎骨が 17 点と鰓蓋骨 2 点が見られた。椎骨の大きさは、体長 26cm の現生シモフリアイゴ標本とほぼ同程度のものからその 2/3 程度のものまで見られた。椎骨の形態はシモフリアイゴに類似するが、一致はしなかった。左鰓蓋骨はこの標本と同程度の大きさで、右鰓蓋骨は標本よりひとまわり大きかった。イワシ類は多くのカットで椎骨が出土している。体長が 10cm 台前半と思われる小さな資料が多いが、18～20cm 程度と思われるものもカット④で 1 点出土した。エイ類も多くのカットで椎骨が出土した。

カレイ類は椎骨と上顎骨が見られた。これらは体長 10cm 台後半～20cm 台後半の個体と思われる。アジ類はいずれも体長 10cm 台の個体の椎骨である。少なくともカット①出土の 3 点は、現生マアジ標本とは少し異なり、現生クサヤモロ標本と非常によく似ていることから、ムロアジ類と考えられる。フグ類は体長 10cm 台の小さな個体の椎骨・歯板が見られ、サバ類は体長 10cm 台後半の椎骨である。カナガシラ類? とした椎骨は、現生カナガシラ標本によく似ているが、側面のしわがやや少ない資料である。体長 21cm の現生標本より若干小さい。

ウナギの個体の大きさは破損のためはつきりしない。アイナメ類とサヨリ類は共に体長 10cm 台後半の個体と思われる。スズキは体長 10cm 台の個体であった。種不明としたものも、資料の大きさから見てすべて体長 10～20cm 程度の個体と思われる。なお、表Ⅶ-3 には含めていないが、カット①ではタイ類の左前上顎骨の破片 1 点も出土しており、表Ⅶ-1 の出土動物種名に含めた。



図VII-1 ブロックサンプル採集位置

表VII-1 出土動物種名

I 貝類		II 魚類	
1	ウミナナ	1	エイ類
2	イボウミナナ	2	イワシ類
3	ウミナナ類	3	ウナギ
4	カワアイガイ	4	サヨリ類
5	ヘナタリ類	5	スズキ
6	ツメタガイ類	6	アジ類
7	アカニシ	7	タイ類
8	ハイガイ	8	サバ類
9	マガキ	9	アイゴ類
10	ヤマトシジミ	10	アイナメ類
11	ハマグリ	11	カナガシラ類?
12	オキシジミ	12	カレイ類
13	シオフキ	13	フグ類
14	オオノガイ		

表VII-2 貝類出土内容

		アカニシ		ハマグリ		ハイガイ		ウミナナ・ヘナタリ類		オキシジミ		その他	計
		左	右	左	右	左	右	左	右				
5区	カット①	5	5	6	2	1	4					オオノガイ左1	25
	カット②	4	1		1	3						不明巻貝2	11
	カット③	5				3	1						9
	カット④	1											1
	カット⑤		1										1
	計	15	7	6	6	5	4			1	3		47
6区	カット①	8	11	12	1	5		2	1	1		不明巻貝(幼)2	42
	カット②	5	1	3	4	2	2	1	1			マガキ1、シオフキ右1、不明巻貝1	22
	カット③	7			1	7						不明巻貝2	17
	カット④	3											3
	計	23	12	15	6	14	2	3	2			7	84
	総計	38	19	21	12	19	6	3	3			10	131

註 二枚貝は殻頂部を、巻貝は芯を数えた。左：左殻、右：右殻、幼：幼貝、マガキは左殻の点数を示した。

表VII-3 6区サンプル魚類出土内容

種	カット①	カット②	カット③	カット④	カット⑤	カット⑥	計
アイゴ類	種付11、総器付左1、右1	種付6					19
イワシ類	種付3	種付4	種付1				10
エイ類		種付1	種付3	種付1	種付1		9
カレイ類	種付2		種付1	上顎付右1			4
アジ類	種付3			種付1			4
フグ類	種付1、歯板左下顎2	種付1					4
サバ類	種付1	種付2					3
カナガシラ類?				種付2			2
ウナギ		種付1					1
アイナメ類		種付1					1
サヨリ類		種付1					1
スズキ		方付左1					1
種不明	種付6	種付7	種付1、上顎付左1	種付2			17
計	31	25	9	6	3	2	76
同定不可種付破片	9	7	1	3	4		24

VIII まとめ

名古屋市瑞穂公園陸上競技場は、昭和 57 年に改築、平成 6 年に改修が行なわれて以降、大規模な修繕・改修が行なわれてこなかった。その中で施設の老朽化や規模、機能不足もあり、陸上競技場の建替えを中心とした施設の整備・運営を PFI（Private-Finance-Initiative）方式により行うこととした。

一方で PFI 方式での事業者決定は、建築事業等の設計業務が事業者決定後となるため、史跡並びに埋蔵文化財包蔵地に与える影響が未知数であるため、調整の難航が想定された。そのため、平成 27 年度以降、複数回の試掘調査並びに範囲確認調査を行ない、史跡である大曲輪貝塚、周知の埋蔵文化財包蔵地である大曲輪遺跡およびその周辺の包含層等の状況を確認した。その成果をもとに、PFI 方式での事業発注の際に、「埋蔵文化財試掘調査結果」を示すとともに、原則として、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲においては、既存建築物の範囲と「昭和 55 年発掘調査範囲」に限って地下躯体等を計画する範囲とすることを要求水準書に書き込むこととした。また、別途「埋蔵文化財範囲図」を示し、掘削工事については名古屋市教育委員会文化財保護室（以下、文化財保護室）と協議のうえで方針を決定することとした。

その後事業者選定手続きの上、令和 3 年 7 月には事業者決定がなされた。本報告書に掲載した調査成果は事業者決定後、具体的な事業実施にあたっての調査事業の成果である。

令和 3 年度の試掘調査地点は、史跡指定範囲に対して養生土でかさ上げしたのちに再整備を目指すにあたり、これまで試掘等が実施されてこなかった指定地内の貝層等の残存状況を確認するために調査を行った。調査では破砕貝を伴う近世・近代耕作土が混土貝層を覆う状況が確認された。調査範囲の東側中央、E5 グリッド付近を中心として、西へ行くほど貝の量が減少する状況が確認された。混貝土は厚いところでも 20cm ほどの厚さで確認され、今回のトレンチ範囲は貝層の西端をとらえた形となった。現在の史跡指定地は、令和 3 年度に追加指定された範囲と合わせて現状で貝層が残された範囲をすべて含んだ形で指定されているであろうことが確認された。また、貝層は広がっていないものの、史跡指定地内には貝層の形成時期の前後の生活痕跡が残されていることが確認された。VIII 章でも述べたが、水洗選別後の掘削土から、旧石器時代末の細石刃や、縄文時代晩期末の土器などを確認できた。貝層に伴って出土する土器はこれまでの調査と遜色がないものの、周辺の包含層に幅広い時代の遺物が包蔵されていることが改めて確認された。特に旧石器時代の遺物は、既往の調査で角錐状石器などは出土していたものの量的には限られていた。時期が少し下る可能性があるが、狭小な範囲の今回の調査の中で細石刃および細石刃核が確認されたことは大曲輪貝塚・大曲輪遺跡の土地利用史を考える上で非常に大きな成果であったといえる。

令和 4 年度の調査は、競技場工事の施工計画の中でスタンドを支えるフーチング基礎のうちの 4 基が包含層に影響を与える可能性があったため、大曲輪遺跡の中央部南側部分で緊急発掘調査を実施したものである。スタジアムの基礎を支えるフーチングについては、既存建築物の範囲と昭和 55 年発掘調査範囲を原則として、包含層が確認されている範囲については、包含層から 30cm ほどの厚さの離隔を取ったうえで施工する調整を行なった。スタジアムの東半については基礎層まですでに削り取られてしまっていたが、それを含めて週百か所におよぶフーチングの底面高を、試掘結果を元に想定した包含層の高さよりも高くあるように調整を進めたところである。その中でも施設の設計上どうしても包含層に掘削がおよぶ 4 か所について発掘調査を実施したものである。3×3m の範囲 4 地点の調査であったが、包含層と土坑、

流路等を確認することができた。旧スタジアムの暗渠施設によって一部破壊されていたが、包含層等の情報を記録にとどめることができた。

また、名古屋市瑞穂公園陸上競技場整備等事業の発注者である名古屋市スポーツ施設室と施工者、文化財保護室で協議の結果、施設整備事業の影響を最小限に留めるため、範囲確認調査を行なうこととし、民間調査機関である株式会社二友組に業務委託して、調査を行なった。文化財保護室が実施した調査地点に加えて遺構等の残存状況を確認するもので、文化財保護室の職員も立ち会った。中でも下内田貝塚については、山崎川にかかる瑞穂橋のすぐ脇に、整備後のデッキをつなぐ橋脚をかける計画があった。文化財保護室では、これまでに下内田貝塚でレクリエーション広場の整備等にかけて試掘等を実施してきたが貝層を良好な状況で検出することはできていなかった。今回の試掘調査は架橋が貝塚にあたる影響を図るために、堤防道路の脇に試掘坑を設定して調査実施した。その結果プライマリな堆積ではないもの、比較的良好的な混貝土の堆積を確認した。この結果、山崎川の堤防道路の下にも貝層が残されている可能性が確認された。この結果を受け橋脚の設計位置を調整し、下内田貝塚に与える影響を最小限にする方針としたところである。

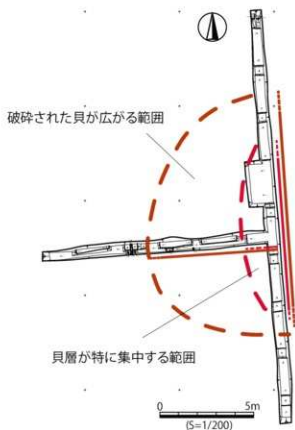
令和6年3月現在、競技場内では新スタジアムスタンドの建設工事が進行している。史跡の整備も同時に進めており、令和8年度には一般に公開される予定である。今後も史跡及び包蔵地を保護しながら、魅力的な事業が進められるように事業者と協力しながら作業を進めていく。



写真Ⅶ-1 シンダー層上面のフーチング床掘状況



写真Ⅶ-2 下内田貝塚の混貝土層



図Ⅶ-1 混貝土層の推定範囲

〔参考文献〕

- 小栗謙太郎 1933 『鳴海町雷貝塚附近の貝塚』『愛知歴史蹟名勝天然記念物調査報告 第11』愛知県
 吉田富夫・杉原托介 1939 『尾張天白川沿岸に於ける石器時代の研究(2)』『考古学』10・20 東京考古学会
 小栗謙太郎 1944 『名古屋市昭和区大曲輪貝塚及回下内田貝塚』『愛知歴史蹟名勝天然記念物調査報告 第19』愛知県
 岡田鉄夫 1941 『吉田富夫 1951 『大曲輪貝塚、附下内田貝塚』『改定増補版 名古屋史蹟名勝記念』泰文堂
 澄田正一・伊藤安男 1955 『大曲輪貝塚』『東海の先史遺跡 尾張編』名古屋鉄道株式会社
 名古屋教育委員会 他(主編) 1955 『中部日本古代文化展』
 福田晋也 1955 『石山貝塚出土遺物を見て』『入海貝塚』愛知県知多郡東浦町文化財保存会
 吉田富夫 1957 『文化財叢書 7 名古屋考古ガイド』名古屋市文化財調査保存委員会
 吉田富夫 1962 『大曲輪貝塚、下内田貝塚址』『愛知の史跡と文化財』泰文堂
 虹村弘 1963 『大曲輪貝塚』『東海の先史遺跡 綜括編』名古屋鉄道株式会社
 吉田富夫 1964 『名古屋考古年表』『名古屋に街が伸びるまで』泰文堂
 名古屋教育委員会 1967 『史跡 大曲輪貝塚』『名古屋の文化財』名古屋教育委員会
 吉田富夫・大参義一 1973 『大曲輪貝塚』『名古屋の遺跡百話』名古屋教育委員会
 名古屋教育委員会 1981 『大曲輪遺跡発掘調査概要報告書』
 江原昭三・木下実 1981 『大曲輪遺跡出土人骨の概略』『大曲輪遺跡発掘調査概要報告書』名古屋教育委員会
 山田治 1981 『大曲輪遺跡の14C年代測定について』『大曲輪遺跡発掘調査概要報告書』名古屋教育委員会
 北野信彦 1981 『大曲輪遺跡における花粉分析結果』『大曲輪遺跡発掘調査概要報告書』名古屋教育委員会
 三渡俊一郎 1981 『大曲輪貝塚(瑞穂グラウンド)』『文化財叢書 81 熱田・瑞穂区の考古遺跡』名古屋教育委員会
 名古屋博物館 1982 『東海の縄文時代』名古屋博物館
 大塚康博 1988 『考古学の風景 名古屋における発見と調査のあゆみ』名古屋博物館
 安達厚三 1992 『愛知県の土風』『国立歴史民俗博物館研究報告 第37集』第一法規出版
 水野時二ほか 1992 『なごやの町名』名古屋市計画局
 浅井金枝 1993 『秘蔵写真館 名古屋いまむかしシリーズ(2) 昭和・瑞穂・大白編』郷土出版社
 伊藤正人・川合剛 1993 『特別展 名古屋の縄文時代 資料集』名古屋市見晴台考古資料館
 井上光夫 1994 『縄文時代の瑞穂』『瑞穂区誌—区制施行50周年記念—』瑞穂区役所
 原田昌幸 1995 『日本の美術 345 土偶』至文堂
 安達厚三・川合剛 1997 『縄文時代』『新修名古屋市史 第1巻』名古屋
 虹村弘 1998 『禁断の果実「加生沢」の三問題』『古人59』名古屋考古学
 小池裕子 1999 『大曲輪遺跡出土のハイガイについて』『名古屋市見晴台考古資料館紀要 1』名古屋市見晴台考古資料館
 渡邊誠 2002 『大曲輪貝塚』『愛知史 資料編 考古1』愛知県
 伊藤正人 2003 『縄文時代の名古屋—地形変遷と遺跡立地—』『名古屋市見晴台考古資料館紀要 5』名古屋市見晴台考古資料館
 川合剛 2004 『名古屋博物館資料図録目録 5 愛知の縄文遺跡』名古屋博物館
 伊藤正人 2005 『耳飾三題—愛知県出土の縄文時代耳飾—』『考古学フォーラム 18』考古学フォーラム
 川合剛 2008 『大曲輪貝塚』『新修名古屋市史 資料編 考古1』名古屋
 伊藤正人 2008 『文化的環境』『日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』日本考古学協会 2008 年度愛知大会実行委員会
 岩瀬彰利 2008 『東海の貝塚』『日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』日本考古学協会 2008 年度愛知大会実行委員会
 山田康弘 2008 『貝塚遺跡における幕制』『日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』日本考古学協会 2008 年度愛知大会実行委員会
 海津正倫 2008 『第1部 名古屋の自然環境 第2章 地形・地質』『新修名古屋市史 資料編 自然』名古屋
 梶山壽 2009 『小栗謙太郎—戦火から国宝を守った男—』名古屋博物館
 名古屋市・(財)名古屋みどりの協会 編 2012 『名古屋の公園100年のあゆみ 資料編』名古屋市・(財)名古屋みどりの協会
 川合剛 2014 『特別展 感じる縄文時代ガイドブック 感じる縄文時代展実行委員会』
 伊藤正人・川合剛 2015 『大曲輪貝塚—瑞穂グラウンドの縄文遺跡—』『あいちの考古学 2015』愛知県埋蔵文化財センター
 三輪みなみ 2015 『大曲輪貝塚からみつかった貝・骨』『あいちの考古学 2015』愛知県埋蔵文化財センター
 藤岡茂 2015 『大曲輪の石器』『あいちの考古学 2015』愛知県埋蔵文化財センター
 川合剛 2015 『大曲輪の石器』『あいちの考古学 2015』愛知県埋蔵文化財センター
 伊藤正人 2015 『大曲輪の土偶・装身具』『あいちの考古学 2015』愛知県埋蔵文化財センター
 伊藤正人ほか 2018 『埋蔵文化財調査報告書 80 大曲輪遺跡』名古屋市文化財調査報告 97 名古屋教育委員会
 名古屋教育委員会 2018 『史跡大曲輪貝塚保存活用計画』名古屋教育委員会
 伊藤正人 2019 『大曲輪遺跡と1980年発掘調査の概要』『第15回研究会(愛知5) 大曲輪遺跡と縄文時代前期』東海縄文研究会
 岩瀬彰利 2019 『大曲輪遺跡の前期貝塚』『第15回研究会(愛知5) 大曲輪遺跡と縄文時代前期』東海縄文研究会
 藤岡茂 2019 『大曲輪遺跡の前期土器』『第15回研究会(愛知5) 大曲輪遺跡と縄文時代前期』東海縄文研究会
 藤岡茂ほか 2020 『大曲輪遺跡発掘調査概要報告書—平成27・28・30年度および令和元年度試掘調査の概要—』名古屋教育委員会
 藤岡茂ほか 2021 『埋蔵文化財調査報告書 91 大曲輪遺跡(試掘調査)』名古屋市文化財調査報告 108 名古屋教育委員会

報告書抄録

ふりがな	まいごうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	埋蔵文化財調査報告書							
副書名	大曲輪遺跡(令和3・4年度調査)							
巻次	99							
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告							
シリーズ番号	116							
編著者名	樋田泰之(編著)・篠編茂・杉浦裕幸・林田愛美・村木望子・新美倫子							
編集機関	名古屋市教育委員会事務局 生涯学習部 文化財保護室							
所在地	〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1-1 Tel:052-972-3269 Fax:052-972-4202							
発行機関	名古屋市教育委員会事務局 生涯学習部 文化財保護室							
所在地	〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1-1 Tel:052-972-3269 Fax:052-972-4202							
発行年月日	西暦2024年(令和6年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおひらきわいせき 大曲輪遺跡	おおひらきわいせき 名古屋市瑞穂区 山下通5丁目	23100	11-25	35°7'22"	136°56'35"	(令和3年度) 2021年12月1日～ 2022年2月18日	25.1	範囲確認 調査
				35°7'19"	136°56'37"	(令和4年度) 2023年1月12日～ 2023年2月17日	36	記録保存 調査
				35°7'23"	136°56'35"	(令和3年度) 2021年11月2日～ 2021年12月23日	181	範囲確認 調査
しもうちだかいつた 下内田貝塚	しもうちだかいつた 名古屋市瑞穂区 藪山町4丁目	23100	11-24	35°7'26"	136°56'37"	(令和3～4年度) 2022年11月2日～ 2023年5月24日	42	範囲確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
おおひらきわいせき 大曲輪遺跡	貝塚・集落跡	縄文		遺物包含層、貝層(前期)		縄文土器、石器	令和3年度 令和4年度	
		古墳～中世		遺物包含層(古代～近 世)、溝(近世)		須恵器、土師器、 中近世陶磁器	令和3年度 令和4年度	
しもうちだかいつた 下内田貝塚	貝塚	縄文～中世		遺物包含層		縄文土器、須恵器、 山茶碗	令和4年度	
要約	<p>令和3・4年度において、以下3回の調査を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> 令和3年度は大曲輪貝塚史跡範囲内の貝層の範囲確認調査を行った。縄文時代前期の遺物が主体であるが、晩期にあたる元刈谷式の土器や石冠なども出土している。 令和4年度は大曲輪遺跡に所在する競技場の基礎設置予定箇所部分の緊急発掘調査を行ない、縄文時代の土坑と近世の溝が確認できた。 令和3～4年度の民間委託調査は、大曲輪遺跡および下内田貝塚の範囲確認調査である。競技場の解体整備に伴うものであり、下内田貝塚も含め、ある程度包含層が残存していることが分かった。 							

名古屋市文化財調査報告 116
埋蔵文化財調査報告書 99
大曲輪遺跡(令和3・4年度調査)

2024年3月31日発行

発行 名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室
〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1-1
Tel: 052-972-3269

印刷 岡村印刷工業株式会社